

ただいま

SHIGENOBU FUSAKO'S

リハビリ中

第11回

重信房子



短歌・月光塾合評会で

私の所属する短歌の「月光の会」では、月に一度「月光塾」を開いています。歌人の研究発表や歌誌『月光』前号合評会などが行われ、その後にお題を決めて詠む月例の歌会が続きます。7月末の前号合評会が担当し報告することになりました。これまで合評会に参加してないので経験はありませんが、前号79号の批評担当を打診されて学習を兼ねて引き受けてしまったのでした。79号の特集は福島泰樹歌集『百四十字、老いらくの

歌』です。著者インタビュ어나この歌集に対する論評やエッセイ、また月光歌人たちがこの歌集から選り取った歌と批評も掲載されています。

合評会担当は、特集を除いて79号掲載の短歌から選り取り批評すれば良いのだと後で知ったのですが、既に「特集を読む」と「歌を読む」と両方のレジユメを準備。歌は読むほど様々な想念が湧くもので批評は四苦八苦でした。

歌集『百四十字、老いらくの歌』は、

ただいまリハビリ中

には詠めない歌の数々で、儂はかも美しいこんな歌たちです。「人の世に弓ひくこともひそやかに春の残夜の上弦の月」「花びらに花びらの影かさねては昏ゆく空になづむ淡色」「うすすべにの色も失せたり古さくら狂れよ降れよと花しきりふる」「潮騒のひびきをとほく聴く夜の月落ちながら海ひきゆかむ」など実存の薄い歌を今回選びました。更に「好きな歌」を選択基準として掲載全歌人の歌から一首ずつ一言感想を述べました。「批評とは何ぞや」と大学時代に論じ合った文学研究部の熱心な情景が、ふと浮かびます。あの頃は、批評をちょっと侮あやむって、小説や詩を「作る側」から評論、批評を論じていた仲間たち。私も小林秀雄などの評論家をよくわからずに批判していたのを思い出しながら改めて、評論や批評について考えさせられました。

『狼をさがして』上映会で

東アジア反日武装戦線（以下東ア）を扱った韓国のキム・ミレ監督の映画『狼をさがして』の上映会に招かれて話をし

ました。私にどんな話が出るのか、東アの人々と同時代に武装闘争を闘ってきた当事者の一人として話をするのが私の役割かなと思いましたが。

会場は四谷の広くない地下室でしたが座れないくらいの方々が映画を鑑賞していました。若い人もいます。私は74年8月の三菱重工爆破の時にアラブにいた時代から話し始めました。

当時アラブは戦争中で、被害者に民間人がいても日本のような衝撃は有りませんでした。イスラエルはパレスチナで非常に多くの民間人を殺してきました。イスラエルはむしろ民間人を狙うことで、パレスチナの地からパレスチナ人を追放するという作戦をずっとやってきたのです。1948年の第一次中東戦争前後では、パレスチナ人口の約3分の2を占めていたパレスチナ人の内、75万人以上の人たちが土地を追われました。人口の3分の1だったユダヤ人が多数派となるよう仕組んだものです。残ったパレスチナ人たちは少数派にさせられました。そこから立ち上がった解放闘争が盛んな時代

日々のツイートを「長歌」とし、それに呼応する短歌を「反歌」として一対に詠んでいるところに歌人福島泰樹の新しい試みがある、とそれを軸に捉えて評してみました。一首一首に通底するのは「死者は死んでいない」と、逝った人々、失われた風景を詠む歌の数々です。親友の作家、故立松和平を長歌で語り「絶筆は田中正造、反逆の時代の闇を見据えて書きし」と短歌で詠む。関東大震災と大杉栄らを長歌（ツイッター）と、「竹棹に反逆の旗はためかせ果々とゆく、若き死者たち」の反歌で詠むといった具合です。

この歌集はまた、国家の原発政策を批判して経産省前で月1回福島師ら僧侶「日本祈祷僧團四十七士」が「死者が裁く」という視座で表白文を読み抗議する姿と重なります。歌集を読むと歌人福島泰樹の歌の在り方は、生の姿勢そのものです。そうした批評をまとめました。そしてまた79号の掲載作品から「花の歌の抒情を掬う」「月と花を歌う」などとサブタイトルを付けて抒情的な歌に注目してそれらの歌を中心に批評しました。私

です。ですから、民間人が犠牲になることが日本で衝撃的にとらえられたのと違って、一般的な戦闘行為として受け止められていたことを話しました。

そして当時の私たちについて。74年というのは、私たちにとっても転換期でした。71年以降のPFLP指揮下のボランティア活動、72年リッダ闘争があつてからアラブ赤軍という形で闘っていました。が、いろんな矛盾も出てきて、PFLPから独立しようという機運が強まりました。それで、欧州や日本でアラブ赤軍に協力していた人たちが新しい組織を作ろうと、74年8月には合宿会議をしていました。また、ドバイ闘争でリビアに拘束されていた丸岡修さんがカダフィ大佐の決断で裁判なしに釈放されたのが74年の8月。更に同時期、アラブ赤軍の仲間がパリの空港で逮捕され、8月、9月には、欧州各地で日本人・外国人の友人たちが20名ほど逮捕、追放されました。松田政男さんもこの時にパリから追放された一人です。PFLPが9月、ハーグの仏大使館を占拠して日本人の釈放を要

求した時期にも当たります。こうした激動期、再編期を経て74年の11〜12月にPFLPから独立した「日本赤軍」を結成したと話しました。

それから間もない75年3月、スウェーデンで日本赤軍の2人が逮捕、日本に強制送還され自供。それを知って、私たちは「武装闘争を闘う日本赤軍は強い」と自ら思い込んでいたけど、本当に強いのだろうか？という反省が生まれました。

自供によってアラブの国に被害を与え、パレスチナ革命にも損害を与えましたが、謝罪してもその実害に何の解決にもなりません。自分たちが間違えばその害毒は未来と人民に返されるんだと、さまざま痛みをなかで実感しました。そういう反省から武装闘争を闘うことが必ずしも主体を強化するわけではないことを学びました。でも闘い敗れた者ほどその教訓もあると気づきました。自分たちの失敗や過ちの害毒は未来と人民に流れると自覚するほど、その責任を引き受けられるように自分たちを変えていこう、あれは、どここの組織の責任というより、変革

を目指して闘った者たちの過ちは、どれも階級の責任として引き受け合っていきたい、武装闘争で逮捕された人たちと共に教訓を出し合って新しい在り方を作っていきたいと思いました。そうした考えから奪還闘争に至ります。

でも当時は奪還というのが国内の運動にどういう影響を与えるのか、救援したり、支え合ったりしている人たちはどんな思いだったのかには、大変無自覚でした。そして75年にクアラルンプール奪還闘争を経て東アの人と初めて出会い、連合赤軍や赤軍派の人たちとも出会い、「戦士、工作者として共に戦う態勢を」をモットーに、どうして我々は間違ったのか語り合いました。私たちはどんな社会を作りたいのか？ 私たちは非暴力の闘いの多様性を軽く見ていたのではないかと、海外の組織の武装闘争や活動経験を学び、自分たちは武装闘争を狭くとらえたのではないかというような内省的な討議を重ねました。

の側に立って日本企業を加害者として糾弾していきました。それが逆説的に、被害者の側に立ったつもりだったのに加害者として罪のない民間人を殺してしまいました。

監督は、韓国が一方的な被害者で日本が加害者というだけの視点ではその反転のドラマを描けないと、映画の撮影中に自分を対象的にとらえ返したのでしょうか。

また、いまの私自身の問題とも関わるのですが、生き直そうとする再生の物語をこの映画から感じる事ができました。特に親たちの一人が、この事件があつて逆に友達も増えたとし、事件から学び本当に良い人生を送ることができたと明るく話している姿が、この映画の肝だと思えます。人と人が出会って再生していく姿を描いていて素晴らしい。

そして、この映画を観ていて、革命活動というのは人に対する働きかけだと、しみじみ思いました。私たちや東アや連赤もこれまでのように総括してきたし、失敗の中から本当に一番大切なものはないか、人間としての出会い、そして人と

り上げました。これもいま思えば観念的な側面をたくさん持っていました。でも、新しい地平を作ろうと決意していた、そんな時代が東アの闘い、逮捕の時代と重なっている、と語りました。

そのうえで映画の感想を述べました。「やっぱり、この映画は日本人では作れなかったのではないかと感じました」と。三菱重工爆破などの被害の負の側面が記憶に刻まれている分、日本の植民地支配に焦点を当てた「反日思想」という意味を冷静に日本人がとらえること自体が難しかっただろうし、キム・ミレさんという韓国人の女性の監督だから見えたものがたくさんあったと思います。この映画は発表した時と現在のバージョンに違いがあるようで、そこにキムさんの問題意識の大事なところがあるようです、と話しました。そこで、被害者はまた加害者であり、加害者もまた一方では被害者であるという重層的な関係を描こうとしていたと。

被害者と加害者の関係を固定してしまふと見えません。東アの人たちも被害者

人との関係性を変え合いながら自分を変え社会を変えていく、そういう姿としていま一度とらえる必要を映画と共に思い返していると話しました。

私は最後に大道寺将司さんの一句、「蒼浪の枯れて国家の屹立す」を示して訴えました。「日本も国家主義が栄え人々が枯れていく危険にあります。なぜなら人々の権力への批判を無視して国家が暴走しているからです」と。そういう国には未来がないし、破産していくのを海外で見えてきました。半世紀以上離れていた日本の社会に私は今立って、人々の危惧や批判が無視され軍拡が進み、驚くほどの国家主義が強まっているというのを実感します。日本の家父長的社会とか死刑制度などを、国際社会と連帯したり、新しい人たちと交流しながら変えていけたらと思います、と締め括りました。その後の交流会で乾杯しながら若者の質問を受けたり、楽しく暖かいひと時を過ごしました。語ることは私自身にとつて良

大菩薩懇親会に参加して

暑い盛りのある日、大菩薩峠事件被告らの暑気払いを兼ねた懇親会に参加しました。大菩薩峠事件とは、1969年11月、当時の赤軍派が首相官邸占拠闘争のために山梨県の大菩薩峠の山荘に集まり、攻撃訓練をしていたところ、11月5日に警察の急襲を受けて逮捕拘束され、戦いが失敗に終わった事件のことです。この時、未成年を含む53人が逮捕されました。その被告たちが社会に帰り生活を営み、また活動を続けながら、有志たちが当時の友情を保持し、半世紀を超えて交流してきました。その内の一人が長く市会議員を務めてきましたが引退することになり、彼のご苦労を兼ねて大菩薩懇親会があるので、参加しないかと誘われましがてら会えるのは嬉しいことで参加を約束しました。

当日は新大久保にあるアイヌ料理店でアイヌ料理を頂きながらかつての仲間たちと再会しました。顔を合わせると半世



土曜会で介護問題を語り合う

いうことですが、財務省の財政制度等審議会では、今後足りなくなるから、早く集めてしまえという話です。介護職員の不足は他の職種より給料が低いことが原因であり、一般給与と比べると大体月額7万円低い、でも気持ちの優しいところで頑張っているという人が多い。つまり介護職に成り手が無いと今後ロボットが導入され、介護でなく監視になってい

紀以上経っているのに、昔の若い時の像と今の笑顔が重なり誰だかすぐわかります。昔の仲間というものは短い期間であったにもかかわらず理想を共有した分、濃い間柄なのでしょう。半世紀以上の歳月を飛び越えて信頼と友情の当時の熱い気持ちのままに再会が叶うのが不思議です。こうして私たちは当時お互いが自分に精一杯で見えなかったことを語り合いました。

あの大菩薩峠にどんなふうにも皆集集し、どんなふうにも逮捕されたのか、その後獄中生活を経て、どんな生活を選びとってきたのか、皆の話を聴きました。住民運動をやっている人、会計事務所経営の都市会議員もいて、当時の若かった自分たちの理想と反省を大切にしながら、今も生きていることを強く実感しました。当時の自分たちの未熟さ、武装闘争に対する考え方、そして今の敗北状況にある変革の途上を教訓的に語り合いました。

大菩薩峠事件の被告は、69年には獄中にいたので昔のブントの大衆運動の感覚が強く、連合赤軍事件には全く驚かされ

た人々です。それでも連合赤軍事件の絶望的結果の責任も引き受けて真摯に活動することがどんなに大変だったかと思わずにいられません。時間を忘れて当時のことを語り合いました。もうこれが我々の最後の集いかと思っただけそうではないよだねと、再会を約し合っています。

明大土曜会で

例年8月は土曜会の参加者が少ないですが、約20名の参加でワイワイと語り合いました。今回は、介護の話に焦点を当てて報告します。農学部出身のジャーナリスト二木啓孝さんから7月17日の「日本の介護は大丈夫か？」のシンポジウム（NPO地域共生を支える医療・介護・市民全国ネットワーク」と「統・全共闘白書編纂実行委員会」との共催）の報告がありました。彼は98歳の母を介護している「老々介護だ」と話していました。

二木さんは、「2000年に始まった介護保険制度は画期的だと思っっていました。なぜかと言うと、それまで介護を抱えるのは全部家庭だったんです。家庭で

抱えて金も全部自分でやってというようなことを、『国が見ますよ』というので、いろいろ問題はあれども、今の健康保険制度と同じくらいすごいことだと。ところが数年ごとの改定、改悪で、どんな悪くなってきた、再び家庭と地域に介護を戻して、『国家は面倒を見ません』という方向に実は動いているということ。つまり親の面倒をみるという『健全な家庭』を単位としながら、政府はそれで国家を作って行こうと。だから、例えば夫婦別姓であったり、LGBTQへ反対するのと同じように、家族の責任だろう、家族の作り方は男女だろ、LGBTQは家族じゃないよね、というような大きな国家のスタイルと歩調を合わせているなと思います」と警鐘を鳴らしています。

2022年度の65歳以上の高齢者は3578万人。このうち75歳以上の後期高齢者が1833万人で51%。それに介護保険の財源が実は黒字であることも知りませんでした。「介護全体の費用が13・8兆円で、介護給付費は12・8兆円。実は1兆円の黒字。何で黒字なのに変わるの？」と

く世界。それに認知症人口も増えていく、とその症状とデータを示しながらの話に私たちが自身の問題として切実に聞きました。「介護が地域と家族に押し付けられる。だったら、ここから反撃しようではないか、と立ちあげた『アクション・介護と地域』、あと2〜3年後に我々が『介護される側』になるまでにこの運動のメドをつけて、若い世代にバトンタッチしたい」と意気盛んです。

また、教育ジャーナリストの小林哲夫さんは、日本大学の改革問題を取り上げました。大学当局が行った『ブランド調査』で「学外から厳しい評価」、「高校生保護者8割が受験させたくない」、「という一面見出しの『日本大学新聞』の新聞を掲げて彼は言いました。

林新体制にはまだ旧田中人脈は残っているがこれまでの日大では考えられない自己刷新を目指そうとしている点を評価している。でも参加していた旧日大共闘の人は、「林新体制に期待できない、日大は解体すべきだ！」と意見を述べていました。

また、今の多くの大学は、HPの年表・沿革に、当時の大学闘争の記載がない大学が多いので、「大学闘争展」の開催など、大学に働きかけたいという小林さんの発言がありました。そこで知ったのですが明治大学も学費闘争など自治会と当局の歴史的事実を記録せず空欄のことです。次代に歴史的事実と情報を残すべきアカデミズムではないのか？と今の大学の在り方にまた驚かされました。

会議の後は暑気払い。そうめんを食べ、日本酒の差し入れ3本を飲み干してお開きになりました。

「付記」自著『はたちの時代』の購読、感想、批評に感謝し、この場を借りてお礼申し上げます。励ましの過分な評価を頂きありがたいことです。本のタイトル由来を聞かれました。「その子はたち柿にながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな」（与謝野晶子）を思いつつ「はたちの時代」と決めました。

今日も憲法違反を繰り返す自民党関係や国会議員たち。靖国参拝のニュースを聞く敗戦記念日です。（8月15日）

ただいま

SHIGENOBU FUSAKO'S

リハビリ中

第12回

重信房子



リビアの洪水

板垣雄三先生を訪ねて

八ヶ岳山麓の山荘に板垣雄三先生をお訪ねする機会がありました。

作家の高山文彦さんが小学館のサイト「小説丸」に「リッダ」を連載しておられて、その中に板垣先生の経歴や当時の日本のパレスチナに関する理解などをお聞きして反映させたいという企画がもちあがり、私と娘のメイも同行することになりました。

それから8カ月後にリッダ闘争がありました。顔も覚えていないが、あの時の学生では：と思ったそうです。このようなエピソードは、連載中の「リッダ」に高山文彦さんの流麗な筆致で記録できたと思います。

板垣先生は私たちの企画を快く受けてくださったので、お訪ねすることになりました。

小淵沢で先生が迎えて下さり、昔は学生たちと夏セミにも使った先生の山荘へと向かいました。短パンに帽子のラフなスタイルの先生は92歳には到底見えません。驚く程若々しく、私と同世代のように見えます。先生は丁度、9月9日に信州イスラム世界勉強会を長野県松本市で開く行事の準備でご多忙のところにお邪魔しました。そのイベントは、マリカらの分離独立運動の主力トゥアレグの人々のサハラ砂漠越え塩交易の記録映画上映と、対話集会「世界の中の日本の中東・イスラーム報道（これまで）」と「これから」とで構成されるとのことでした。地域にそうした場があるのを聞き、私は

板垣先生が時折昔のエピソードを語っておられるのを知っていたので、この機会に高山さんと一緒にいろいろな話をお聞きしたいと思いました。そのひとつは、板垣先生が1971年に京都大学で集中講義を行ったときのエピソードです。

当時、京都大学では文学部だけ学園闘争がまだ続いていて学部長室も学生が占拠、授業再開もできず、困った学部当局は局面打開のため外部の専門家を招き、学生たちも粉砕はできない「パレスチナ

昔と随分と違う文化の流れがあるのを知りました。やはり来てよかった、板垣先生から日本の1960年代から70年代の中東政策や、それにまつわるお話を伺って、高山さんも書く内容に確信を得る良い機会となったようです。

そしてまた一行は、板垣先生が当地でやっておられる八ヶ岳板垣塾の方々ともご挨拶する機会がありました。八ヶ岳板垣塾は、21世紀に入ってイラク戦争後パレスチナ問題の市民勉強会として生まれたのだそうです。ウクライナ戦争で学習会は復活し、世界を読み解く学習を進めておられるとのこと。メンバーには、かつて全共闘時代の理想や失敗の経験を大切に、地域の暮らしの中でその生き方を活かしながら、地道に訴え行動してきた方々もいます。反戦と平和を信条に、深まる差別に反対し、国家の戦争政策や原発政策に異議を申し立て、政治ばかりか新しい文化や伝統を住民の側から提案し創っていく姿に大きな可能性を実感しました。ローカルな身の回りから生まれるこういう場こそ、国家の過ちを正すき

問題」の集中講義で授業再開の突破口を開こうという案が持ち上がり、白羽の矢がたった東大の板垣雄三先生に頼み込んだようです。

こうして71年9月1日から集中講義が始まりました。先生の京都の宿舎は鴨川の河原に向かつて開いた景色の良い地上階。ある夜、裏の河原側の窓をコンコンと叩く者がいた。開けると3人の学生が先生にお伺いしたい、と言うので部屋に入れた。彼らは「これからベイルートに行くのだが、アドバイスをお聞きしたい」と言ったそうです。先生は学生たちの人目を忍ぶ訪問の仕方、この学生たちはパレスチナ解放闘争に参加しに行くのではと直観したそうです。先生はそのことは尋ねず、「君たちは私の講義を受講している学生か？」と尋ねると「受講していない」と答えたそうです。先生は学生たちに「まず現地の社会と文化を知り学ぶため10年計画でアラビア語を覚えなさい。気に入った相手と付き合うだけでなく、多様な人と知り合うこと」となどと説教したそうです。

っかけになる力だと感じました。ご挨拶の時間しかありませんでしたが、こういう変革追求の生活の場を生きる姿勢と板垣先生を囲む友情には、人と人との率直な連帯が満ちていて、とつても素晴らしい出会いでした。どんどん悪化していく世の中にどう立ち向かっていったらいいのだろうと語り合える人々がいるのを感じ強く思いました。こうした知的イニシアティブの集まりや場が日本の中にたくさんあるのでしょうか、それに初めて接し学びました。

また先生ご夫妻は、7世紀に日本国家が成立する前後から反植民地抵抗の原点である諏訪地方の歴史を説明してください、縄文時代の遺跡や諏訪大社に案内して下さいました。諏訪はこの列島の縄文文明の中心拠点であり、東北へかけて征服を掲げるヤマト朝廷の国家形成と先住民を底辺に繰り込むその植民地支配の歴史を学び直す上で大変重要な地域だと思います。ここは日本国家の住民の抵抗の原点、百日紅の盛りの道をそんな思いを噛みしめつつ見学する貴重な機会でした。

歌会合宿も阿波踊りも

8月、月光の会の合宿に初めて参加しました。どんなことをするのか興味津々。1日目は、まず毎月恒例の題詠歌会からです。いつもは30首を超える歌を2時間で駆け足に批評していくのですが、合宿では時間をかけて批評し合ったので、皆さんの批評を多く聞く機会となり色々な視点からの評に、なるほどと学ぶことが多い。題詠は「立」。8月にふさわしい歌をと私はこんな歌で参加しました。「灼熱にドーム燃え立つヒロシマ忌はだしのゲンのいのち危うし」。今では教育委員会自体が「はだしのゲン」を教科書から外すという時代になっているのを危ぶんで詠みました。その後、夕食を兼ねた懇親会。懇親会は各自のパフォーマンスを披露する習わしだそうで何か準備してくるようと言われました。えっ、パフォーマンスなんてやったことも無いのにどうするのか、と友人に聞いたら自分の短歌を朗読したりすればいいんですよとのこと。

始まると歌人たちは堂々と、あるいは少し照れながら好きな詩歌や賞をとった短歌を朗読したり、働く現場での労働者としての闘いに敗れた経験をドラマチックに演じたり、チェロ奏者の歌人は演奏して楽しませてくれたりと多彩なパフォーマンスです。私はパンタさん追悼も兼ねてパンタさんの曲をBGMに「ライラのバラード」を朗読しました。懇親会は、歌会以外の歌人たちの一面を知り、親しみが湧き仲間意識が育ち、おしゃべりが続く、そんな楽しい時間です。

2日目はそれぞれが提出した短歌五首連作の批評会が午前午後と続き、その後主宰者・福島泰樹さんの「関東大震災百年」の講演。参加者20数人の連作の批評はとても新鮮で楽しい学びです。丁度発行された角川の月刊誌「短歌」を月光の会事務局から受け取りました。9月号に「結社賞受賞歌人大競詠」特集があり、全国の結社で賞を受けた26人の歌人の五首連作が載っています。月光の会で黒田和美賞を頂いたので寄稿した私の連作も載っていました。

歌会合宿がお開きになると、私はそれからメイと待ち合わせて高円寺の阿波踊り見学に向かいました。私が一度お祭を見てみたいと言っていたので友人に誘われたメイが私も誘ってくれました。お祭は小学生時代の盆踊り以来ですが、私はそんな事が大好きな商店街の子でした。

高円寺駅ホームは朝の通勤ラッシュのように満員。かき分けながら駅を出て矢印と音楽に導かれて中央演舞場へ。車用大通りが今日の舞台で、両脇にシートが敷かれ座って見ている人、その背後の歩道は、道が見えないほどの立ち見の列。街路樹の間から阿波踊りを軽妙に踊りながら来る多彩な「連」に見とれてしまっています。スマホを高く掲げて写真は撮れるのですが眼で見れるのは狭い隙間からそれでも見飽きた人が退くとそこに滑り込んで何とか立ち見の一番前にたどり着いて、流れるように続く連の踊りを見学しました。良い場を得たのに、疲れていたのが早々に引き上げましたが、生の祭りは迫力があってやっぱり素晴らしい。昔のでもあまりに整理管理されていて、昔の

ような庶民が飛び入りで踊る雰囲気はありませんでした。

国家賠償訴訟の傍聴へ

1959年の「伊達判決」原告の土屋源太郎さんによる国家賠償訴訟の結審公判があり、傍聴しました。公判はかつて私が国と争った同じ103号法廷です。

開廷で裁判官が登場して分かったのですが裁判長が変わっていました。土屋さんから原告側弁護士も知らされず女性の新



高円寺の阿波踊りを見学

裁判長に交代していました。

これまで直に証言を聞いてきた裁判長を結審の日に変えるのは恣意的に思えてしまいます。私の公判も結審近くで交代しましたが、それでも裁判長の交代は事前に弁護団に伝えられました。

最高裁の事務総局人事局が、審議の内に触れず手続き上の問題にして門前払いにするよう裁判官の人選をしたのでは、と勘繰りたくなります。

この国賠訴訟は、最高裁判所長官の違法行為を裁くものです。田中最高裁長官が駐日米国大使らと密談して伊達無罪判決を有罪に捻じ曲げたこと、憲法審査を「統治行為論」によって封じたこと、つまり司法の根幹を問う裁判です。その結審法廷での裁判長交代は内容を封じたに等しい気がしました。

そんな空気の中、公判が始まりました。前回は原告土屋さんが最終陳述を行ったので、今回は弁護団による最終弁論が行われました。未だ国側の提出すべき公文書も届いていないことも判明して、新裁判長は、原告側の文書や証言で詳しく

出されているので判断に問題ないというような発言をしましたが、その発言自体にこの裁判の危うさを感じました。土屋さんも後に、公文書を分かっていたのと同じ発言だ、と憤慨していました。開廷後、総括集会が衆議院議員会館の会議室で行われました。

議員会館に移動する途中で、私は土曜日の友人達と経産省前に向かいました。この日はあの3・11の大震災を経験して、反原発を掲げて経産省前に初めて座り込みテントが設置された日です。あれから12年です。記念集会が開かれていると知って連帯のつもりでと、ほんの一時立ち寄りしました。多くの人々がカラフルな旗や幟や写真・絵を掲げ、マイクの前では演奏と共に人々が歌いながら丁度盛り上がりつつあるところでした。この経産省前テントの創設者のひとりであり、旧ブントの先輩の味岡修さんらに挨拶をしてすぐ公判の総括集会へと向かいました。

総括集会は弁護団が概括して話しました。「本件訴訟の意義は砂川事件上告審判決の違法性を明らかにして第一に、土屋源



Libiaの大洪水

れ、豊富な資源を米欧に奪われ蔑まれてきたが、アフリカこそ人類発祥の地。アフリカ大陸を欧米と対等の一つのアフリカ国に変えるのだ」という夢をたびたび語っていました。

レーガン政権は米国人が入り出す施設に爆弾を仕掛けたテロの背後にカダフィありと、86年に空爆で殺そうとして失敗しました。

90年代に入ると、リビア政府は化学兵器・核兵器開発を放棄し西側と共存する意向を示し、カダフィの息子セイフ・イ

太郎さんら砂川事件の元被告の権利・名誉を回復すること、第二に、一番「伊達判決」（駐日米軍は、憲法9条違反。全員無罪）を復権させること。第三に最高裁大法廷判決の「統治行為論」の見直しを図ること、第四に違憲法令審査権を再構築すること、第五に司法の独立を回復することだ」と述べていました。

こちらが勝てば国が控訴するし、負ければ我々が控訴する、いずれにしても長い闘いであると弁士がその覚悟を述べました。この国賠訴訟を公訴手続き上の問題で終わらせてはならないと思います。「消滅時効」とか、「除斥期間（国側田中裁判長の不法行為から20年経過による請求権の消滅）」などを使って内容に触れず棄却するような判決になるのではないかと気がかりです。この砂川事件の上告判決「統治行為論」と、政権の改憲策動の両輪によって憲法の形骸化が深まりました。日米安保条約の下に憲法が位置付けられ、日本の未来が決められてしまっただけです。今の時代に蟻の一穴のような判決となるかは疑問ですが、勝利は巨

大な一歩です。判決は来年1月15日です。

リビアの洪水から思うこと

リビアの大洪水は凄まじい。被害が特に大きかった東部港湾都市デルナの市長は死者が2万人を上回る恐れと言及。あまりに悲惨な光景……。

リビアの洪水は、自己決定権を持たない弱い人々が真つ先に被害を被るといふ今の世界のどこにでもある悲惨な現実を晒しています。犠牲の大きさは自然災害というより人災です。

リビアは外国政府の支援を受ける東西二つの政府が正統性を争い内戦中です。デルナはその狭間。政府は世界気象機関の天候激変の警告を受けながら住民に知らせず、避難を呼びかけるどころか、外出禁止を指示。暴風雨に加えてデルナ市上流にある二つのダム（カダフィ時代に建設）が決壊し津波のような激しい洪水が襲ったのです。カダフィ政権崩壊後、ダム劣化の危険を専門家が警告しながら補修予防対策を取らなかつたのです。地域への交通網も都市も水没破壊されて即

スラムが西欧との協調姿勢でリビアの舵取りをしていました。2009年には、G8先進国首脳会議にカダフィを招待しています。でも欧米諸国は、カダフィの「USA構想」に危機感を持ちます。USA構想とはアフリカを統一国家にする「アフリカ合衆国」(United States of Africa)構想です。この構想は、アフリカの統一通貨を作り金本位制を採用し、豊かな資源を活かして一つのアフリカがEU等と対等に共存する構想です。アフリカに利権を持つ欧米政府はこの構想は許しがたかつたでしょう。「アラブの春」が起きると民衆蜂起に乗じてNATO空軍は、半年の間に2万回以上出動し8000回近い空爆を繰り返してリビア政権とインフラを破壊し、カダフィ殺害に至りました。

このリビア政府打倒が反体制派の力によるものではなかつたことは明らかにされています。以降過剰な武器流入によってIS（イスラム国）台頭や国内の部族的地帯的対立は無政府状態に陥りました。外部の力でカダフィ政権を倒せば

時救援体制が組めないという現実。

カダフィ大佐が率いたあの豊かな産油国リビア……。巨費を投じて砂漠に緑と水を回復させた70年代を知る私はとても悲しい。カダフィ時代ならダムの定期補修が行われていたのに。

エジプトのナセル大統領を尊敬していたリビア自由将校団が、イドリス王制を無血クーデターで倒したのは1969年。石油国有化と国民への利益の還元が始まり、リビアは豊かな国になります。このクーデターを率いた27歳のカダフィ大佐は反資本主義と反植民地主義を貫き、当時の米欧をきりきり舞いさせました。米欧報道はカダフィを「中東の狂犬」とか「テロリストの親玉」と報道しましたが、それはメデア戦争の一方の側の報道です。カダフィは西欧の価値観と対決し、パレスチナ解放勢力ばかりかIRAやアジア、欧州の人民勢力や解放勢力などを大いに支援しました。

70年代初頭から彼の執務室には大きなアフリカの地図が掲げられていました。それを見上げながら「アフリカは分断さ

リビアが内乱状態になると専門家たちが警告した通りです。カダフィ政権は独裁的強権的手法はあつたもののリビア国民と国の繁栄を築きあげたのです。NATOは合法的に選ばれたカダフィ大佐を排除し、リビアを破壊しました。以来行政も既存のシステムも破壊され、2つの政府の軍事対峙の前で市民団体も力がありません。リビアは住民の犠牲の上に内戦が今も続いています。この歴史的事実こそが、洪水被害を拡大させた要因です。

モロッコの地震に続くリビアの洪水。決定権を持ちえない住民の犠牲があまりにも大きい。洪水被害の再建は腐敗と暴力支配の2つの政権への支援ではなく、いのちをまもる行政機関や市民団体への直接支援を通じて住民自身が再建する力を育てるべきでしょう。

1982年9月の今日はベイルートのサブラ・シャティール難民キャンプでパレスチナ人が千人以上虐殺された日。忘れられない。いのちの叫びに報いる社会をまだ私たちは創りえていない。



10月15日新宿駅での集会で発言する娘の重信メイさん

省が管轄してきた占領下西岸地区や国家警備隊が管轄した東エルサレムの治安維持を含めて、全土一括統制下に置く権限を握りました。彼は人植者と軍の一体となったパレスチナ人弾圧の先頭にいます。占領地併合を主張してきた「宗教シオニズム党」党首のモトリッチは、財務相と、占領下パレスチナ人の出入国を含む民生局を管理する大臣兼務となりました。彼は自治政府の財源の半分を占めるといふ占領下パレスチナ人から代理徴収した税金をパレスチナ側に送金するのを減額や停止し妨害してきました。またイスラーム教徒にとって神聖なエルサレムのアルアクサ・モスクのこれまでの取り決めを無視して、ユダヤ教の祝祭の場に替えようとしてきました。モトリッチは4月、欧州で公然と「パレスチナ人など存在しない。パレスチナ人の言語、通貨、歴史や文化もない。何もない」と断じました。こうした大臣たちが人植者を扇動してパレスチナを地図からも国際社会からも抹殺するイスラエル化の既成事実を積み上げてきました。

その総仕上げとして、ネタニヤフ首相は9月国連総会で「新しい中東」として地図まで掲げて演説しました。この地図のイスラエルには、西岸パレスチナ自治区もガザ自治区も抹消されています。シリヤ・ゴラン高原も消されています。占領地併合済みの大イスラエル地図が国連の場で堂々と掲げられたのです。国内でやっている国際法、国連決議を無視した非合法な「拡張イスラエル」を国連の場で公然と掲げ、サウジアラビアを含むアラブ諸国とアラブハム合意を基礎にイスラエルが経済関係国交を開く「新しい中東」を作ると宣言しました。アラブハム合意とは2020年UAE（アラブ首長国連合）とイスラエルが外交関係を開いた合意のことで、その後イスラエルとの国交樹立は、バーレーン、スーダン、モロッコと続きました。「パレスチナ問題の解決なしにイスラエルと国交を結ばない」というのがアラブ連盟の原則でしたが、イスラエルは逆に「アラブ諸国と平和条約を結びパレスチナ問題を解決する」と主張してきた長い歴史があります。

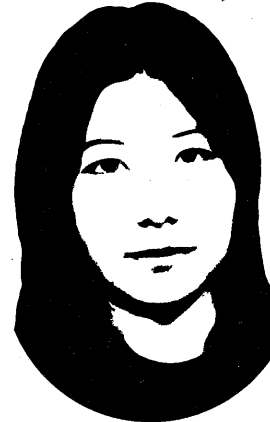
ただいま

SHIGENOBU FUSAKO'S

ハビリ中

第13回

重信房子



殺すな！今こそパレスチナ・イスラエル問題の解決を！

人生の大半をパレスチナの友人たちと共にしてきた私はイスラエルによるガザの人びとへのジェノサイドが進む中、夜も昼も不安と怒りが消えません。家族、親戚を何人も殺されているだろうと思うと、ガザ出身の友人に電話するのも辛く躊躇する日々です。イスラエルによるガザ侵略、ジェノサイドを、友人として人間として許すことができません。

この原稿を書いている10月22日の段階で、ガザ地区住民の死者、負傷者、瓦礫の下の行方不明者の数は恐ろしい勢いで増え続けています。これからガザへの地上侵略になれば桁違いのジェノサイドが長期に続く予測されます。イスラエルのガザ侵略を止めるまで世界中で声をあげてほしいと祈るような気持ちです。

10月7日、パレスチナ勢力は「アルアクサ洪水作戦」を開始しました。日本の報道では「ハマスの攻撃」と言いますが、ガザの解放勢力が一致団結してこの作戦に参加しています。ハマスのアルカッサー

ム旅団、ファタハのマルワン・バルグーティを指導者と仰ぐアル・アクサ殉教者旅団、PFLPのアブアリ・ムスタファ殉教者旅団、イスラミック・ジハードなどが一丸になっています。PFLPは、ハマスのイスラーム建国路線には反対して来た、にもかかわらず、です。では何故こうした大規模な一致した作戦に踏み切ったのでしょうか？

パレスチナの生存の闘争が臨界に達するほど人種差別、民族浄化政策が続いたからです。パレスチナ側が仕掛けたというよりイスラエル側の挑発が生んだ結果と言えます。この洪水作戦はアラブ民衆に決起を呼びかけ、民衆の連帯でイスラエルや、アラブ各国政府や国際社会の現状を変える戦いを復権しようという意図もあります。

パレスチナ抹殺計画

昨年12月末にネタニヤフ政権が成立して以降、パレスチナ人への極端な民族浄化政策が続きました。ネタニヤフは汚職で起訴されており、首相の免責特権で罪

今、サウジを巻き込んでイスラエルの主張通りになるといふ驕った宣言でした。しかし、イスラエルと和平を結んだどの国の国民も、パレスチナ問題解決抜きの和平を認めていません。

ネタニヤフ政権は司法改悪に対するイスラエル国民の激しい反対に直面し、その批判をかわすべくパレスチナ人への弾圧を益々強化してきました。

パレスチナ自治区とは名ばかりの西岸自治区でパレスチナ人への激しい弾圧を繰り返してきました。ジェニン難民キャンプへの大規模攻撃では、自衛武装する若者たちに撃退され、イスラエル軍はアパッチヘリを投入して殺戮を繰り返しました。またナブルスのホワラ村では、入植者が何百人も押し寄せて村を放火、破壊して村人を追放しようとしたり、パレスチナ人の集合住宅を違法だと難癖をつけて爆破したりと激しい民族浄化が繰り返され、すでに政権樹立から9カ月足らずで260人が日々殺されてきました。

このように地図上からも実態としてもパレスチナ人をアラブ諸国に追放し、そ

こに同化させてパレスチナ問題を終わらせると昔から企んでいたパレスチナ抹殺の「第二のナクバ」の動きに、パレスチナ人は絶望よりも戦いを選んだと言えます。

武器を持たない人の命を奪うな

今回イスラエルは、最強を誇る諜報機関もバイテクも役に立たず、一方的に非国家主体に敗れました。現地の報道によると、エジプトは1週間前にイスラエル側にハマス等の攻撃を通報していたようです。イスラエル諜報機関が情報を得ていたと考えるのが自然です。結局ネタニヤフ首相らが、ハマスの攻撃を利用しようと思んだとみるのが妥当だと私は思います。2005年のガザ撤退に反対した者たちが今権力を握っています。ガザにいるパレスチナ人なんかは何ができるのか、飛んで火に入る夏の虫、とばかりにハマスを暴れさせて、それを口実に歯向かう勢力を根絶やしにしてガザを再占領してやろうと、高をくくっていたのだと思います。「第二のナクバ」を仕掛けるためです。

ところがパレスチナ解放勢力側は、50年前の中東戦争を記念する日を選び、あの第四次中東戦争を思わせる大攻撃をやったのけました。ネタニヤフ政権は大慌てで、遅れてハマスを根絶やしにすると言言し無差別大虐殺をはじめています。ガザを封鎖し、水、食料、電気、燃料も完全停止しました。

東京の23区の6割に満たない365平方キロメートルの土地に230余万人がおしこまれて暮らすガザ地区は「天井のない牢獄」と言われてきました。パレスチナ人の命をどうでもよいとするイスラエルの指導者に、人質を大切に考えるはありません。米欧の政府がハマスを非難し、イスラエル支持の大合唱をしている限り、イスラエルは更に空爆、地上侵略戦によるジェノサイドを繰り返すでしょう。何としても止めなければ。

私は、パレスチナの友人たちと共に闘い、生と死を日々共に見つめる中で生きてきました。私たちは戦いの中で、無関係な民間人を巻き込み、危険に晒し被害を与えた過ちもありました。だから自分

たちの反省としても、今こそ訴えたいのです。どんな戦時下でも武器を持たない人の命を奪うことは許されない、と。無辜の誰の命も奪い合ってはほしくないのです。イスラエルが永続的な安全を真に望むならば、こうした戦争犯罪、国際法無視の占領政策の日々が、パレスチナ人を武装勢力に育てていると自らを深刻に省みるべきなのです。

パレスチナから見える世界

ハマスなどパレスチナ勢力を非難する前にまず考えてほしいのです。だがが占領者なのか？と。イスラエルが占領者であり、パレスチナ人は占領された土地に住む被害者であるということ。この前提を抜きにした発言が横行してきたことが、平和解決をここまで損なってきました。ガザの人々の8割は、ナクバでパレスチナ各地の住居を奪われて追放されガザの難民キャンプで生きることを強いられる人々です。密集した地域に封鎖され外に出ることもできず、不自由な生活を強いられているうえにイスラエルから空爆

攻撃され、2008年から2009年に1400人、2014年には2200人もの住人が殺されてきました。西岸地区も同様に、「自治区」とは名ばかりでイスラエル軍は自由に侵入し逮捕、殺戮、破壊を繰り返しているのです。まずなによりも占領を終わらせるべきなのです。占領された人々が、人間の尊厳を掲げて戦うことは国際法、国連決議でも認められてきました。世界人権宣言に基づく権利を勝ち取る抵抗権は世界の人々の奪われてはならない権利です。まず国際社会がこぞって占領をやめさせる方途を作るべきでしょう。

日本ではウクライナ戦争の話ばかりが詳細に伝えられながら、パレスチナの危機は伝えられませんでした。今やウクライナ戦争は、ウクライナ、ロシア市民らの徴兵制の犠牲の上に、米、NATOのロシアに対する戦争と化し、世界中を危機に陥れています。

パレスチナ自治政府のマリキ外相は「70年以上もパレスチナで実現不可能と言われてきたあらゆること、ウクライ

ナでは、1週間たらずで日の目を見た。欧米の動きは驚くほど偽善的だ」と批判しています。PLO(パレスチナ解放機構)も「ロシアに厳しい制裁の一方で、ウクライナ難民を手厚く受け入れ、ウクライナ人の武装抵抗に喝采を送っている。ウクライナ支援と共通の支援がパレスチナに何故行われないのか？」と問うています。イラク人も言います。「ロシアを戦争犯罪国というが、米国はイラクで、何をしていたのか？ 拷問、誤爆、殺害、何十万、何百万の住民を路頭に放り出して難民化させてきた。その戦争犯罪に類かむりして自国とイスラエルの犯罪を裁かせない。イラクばかりではない。アフガニスタン、リビア、シリア、イエメンなど多くの混迷を作り出し、その責任を欧米が負っていることが意識されていない。植民地主義の産物だ」、こういう欧米批判です。パレスチナから見えるのは二重基準の世界です。

京都円山野外音楽堂の集会

10月15日、円山公園で「反戦・反貧困・



京都での集会の後のデモ行進

年100年先を考えればよくわかります。日本が今のままでは心配です。自民党の米国政府追隨の戦争政策、立ち遅れた家父長的文化を改革して、アジアと善隣友好的に立つ日本を生き延びさせましよう。何としても日本の戦争への道を押しとどめたい、としめくり、最後に一つ付け加えたいと発言しました。11日、娘のメイがTBSの報道番組に出演しパレスチナ問題を語りました。ところが酷いパッシングが来ました。「テロリストの娘」に発言させたTBSに対して是非難が続き、イスラエル大使が先頭で騒ぎ立てました。

私とメイは別人格です。日本は憲法で保障された言論の自由があります。それにメイは、2005年から5年間、朝日ニュースターの時事報道番組でキャスターとしてずっとテレビに出ていた人間です。ジャーナリストとして中東をよく知るメイのイスラエル批判の発言が的を射ているので、イスラエル大使は発言内容に危機感をもって封じようとしたのでしよう。今更テレビ出演に声高に抗議するイスラエル大使の発言はヘイトスピーチを煽るものです。こうした排外主義、ヘイトスピーチの言論封殺の深まりは、「新しい戦前」というよりまさに日本の戦時下を思わせます、と言いました。

そして私は発言の結びに、このイスラエル大使を批判してフランスの哲学者ヴォルテールの思想を表したとされる言葉を書きました。「あなたの意見に賛成できないがあなたの意見を述べる権利は死んでも護る」と。これが民主主義であり、

イスラエル大使は自国の強権的な全体主義に染まって発言している姿だと。そしてパレスチナ住民も、人質もこれ以上殺されてはならない。ガザ停戦こそウクライナも含む世界大戦に向かうベクトルを、反戦と共存・協調へと転じる機会としていくよう訴えたい、と発言を終えました。

今、ジェノサイドを目の前にして、日本社会の一人ひとり、何かできることを行ってほしいという思いでいっぱいです。パレスチナには優れた映画も数々あり、日本でも鑑賞できます。ガザの置かれている状況を注視し、周りの人たちと理解するために集会をネットで探して行くのもいいしデモに行くのもいい。私のパレスチナに関する本（『戦士たちの記録』『幻冬舎刊等』）も読んでもらいたい。日本政府は、イスラエルのガザ地上侵略ジェノサイドを支持せず、抗議はできないとしても米国政府とは一線を画した対応を求め、破壊されたアハリー・アラブ病院への緊急支援寄付など身近なところから、手を差し伸べてほしいと願っています。

(10月22日)

反差別共同行動in京都 変えよう！日本と世界『新しい戦前』にさせないために―大軍拡と大増税を許すな！―と訴える集会に招かれて参加し語りました。

去年10月に、初めて公の場で挨拶したのもこの円山集会です。集会の前にパレスチナの衝撃的な戦いが起こり、パレスチナについて語ってほしいという依頼もあつてその点に絞って話をしました。ここに書いてきた内容はそこで発言した内容でもあります。そしてさらに次のように訴えました。「今こそイスラエルの占領に制裁を！ 国連決議の実行を！」と。

パレスチナ人の怒りは、「アルアクサ洪水作戦」となって爆発してしまいました。米欧のバックを得てイスラエルは、民族浄化の徹底的な暴力支配をこれまで以上に続けています。アラブ諸国の国民はパレスチナ支援を訴え日々イスラエルのジェノサイドを止めようとしています。欧米でもそうです。アラブ、パレスチナ系アメリカ人とユダヤ系アメリカ人が一緒にイスラエル政府、米国政府に抗議し議事を占領して訴えています。日本でも

ガザのジェノサイドを止めようと市民たちがイスラエル、アメリカに抗議しパレスチナ連帯を訴えています。今こそ国際社会が真面目にパレスチナ問題を直視し、この戦争を中東情勢の平和的解決へと転換させるチャンスなのです。イスラエルの占領地からの撤退、パレスチナ人の民族自決、難民問題の解決を目指す国際社会のイスラエル包囲からはじまる公正なアプローチこそが問われています。

私はアラブの国境を越えた民衆革命を戦略的に求めつつ、あえて「国連決議181号を基礎に解決を」と訴えたい。1947年の決議181号は、ユダヤの国とアラブ（パレスチナ）の国の2つの国を作ること、エルサレム地区は国連が特別管理することを決定しました。それを無視してイスラエルが占領を続け、それを米国が無条件に支援してきたことが戦後秩序を歪め破壊してきたのです。この決議181号は、1988年のパレスチナ国家独立宣言で全土解放路線に代わる反シオニズム国家を目指すユダヤ人との共存の路線として、パレスチナ国会（P

NC）で採択しています。

イスラエルの戦争犯罪を告発する民衆の世界の動きに目を向け、想像し世界とつながる日本を描いて欲しいのです、と私は円山集会で訴えました。

世界は最早、米欧諸国の二重基準で壊れた国際秩序をあてにできないことを知っています。国家レベルですがBRICSでは、サウジアラビア、UAE、イラン、エジプト、という中東の4カ国を含む6カ国が新たに来年からBRICSに加わります。世界のエネルギーの6割を掌握し、脱ドル体制も目指すでしょう。8月キューバで開催されたG77プラスチャイナは既に134カ国が加盟しており、首脳が集まりました。議長国として登壇したキューバの大統領は、途上国は不平等な貿易や気候変動問題などで先進国の犠牲となってきたと批判し、「われわれグローバルサウスが、何世紀もの間続いてきたゲームのルールを変える必要がある」と主張しています。世界は資本主義の一元的文明ではなく、自然な流れとして多極的な多文明の社会を求めています。50

ただいま

SHIGENOBU FUSAOKA'S

第14回

これは戦争ではなく 第二のナクバ・民族浄化



重信房子

私たちは武器を持たない人間が次々と血を流し殺されていくジェノサイドを、ネットやテレビで見られる世界に住んでいると改めて実感します。命がけで真実を伝えようとする人々のお陰で私たちは普段見えない現場を知り、人として見過ごすことができない、何かしなければと世界中の市民が心動かされています。長い間生死をともし、友情に結ばれたパレスチナ人と今も交流する私には家族の生き死にと同じ出来事です。

これは「イスラエルとハマスの戦争」ではありません。「イスラエルとハマスの戦争」「テロとの闘い」などとして真実を覆い隠そうとする西歐支配層の指摘は映像に裏切られています。ウクライナ戦争で「戦争犯罪」とロシアを断罪した人々が、「自衛権」の名でイスラエルの戦争犯罪を許すという二重基準を鮮明にしています（大体、占領国に自衛権が有って占領された住民に自衛権がないなんて奇妙な論理です）。

いま起きているのは、非国家主体の抵抗闘争に一撃されて国家の威信を傷つけられたイスラエルが、「ハマスを破壊」の名分によって武器を持たない無辜のパレスチナの人々に対し無差別に報復懲罰を行っているジェノサイド、国家テロです。パレスチナ人たちはこれがガザ占領、パレスチナ人追放を謀る民族浄化だと敏感に察知しています。

かつてパレスチナ人は「ナクバ」というイスラエルの民族浄化によって1947年から1949年の間に、1万4000人以上の虐殺と75万人以上の故郷からの追放を経験しました。今回は既に、150万人が難民となり、1カ月で1万人が殺され、今も民族浄化は続いています。こんな一方的ジェノサイドが進歩を謳う人類社会に訪れるとは言葉もありません。空爆、海から陸からの砲弾によって無差別に、いやむしろ意識的に病院、学校、避難ルートで市民が殺されています。電力、水などのインフラ施設、国連施設から、パンを製造する小さな工場、住居に至るまで爆撃され子ども、お年寄り、女

性が無差別に殺され続けています。

イスラエルのデマと 闘う情報戦

この「ガザ虐殺」の特徴は、ホロコーストを禁じたはずの主要先進国が、イスラエルによる国際法と国連決議無視のジェノサイド・ホロコーストを「自衛」だと容認していることです。その結果、世界の人々の目の前で国際法違反の数々のジェノサイドが行われても抑止し得ないという現実が陥っています。

もう一つの特徴は、情報戦が戦争を左右するという現代社会を反映している点です。「ハマスのテロ」一色の報道が、病院が爆撃され500人近くの死者を出したというニュースで一気に見方が変わりました。イスラエルが主張するような誤爆ではないことは、いくつもの検証機関によって証明されています。「パレスチナ側の誤爆」「ハマスの拠点だから」「テロとの戦い」——古くて新しいイスラエルの情報操作や偽りの映像が続くなか、アルジャジーラなどの報道機関が現場から検証し、事実を伝えてくれるのです。その

結果、親イスラエルの米欧の支配層と違って、ユダヤ人を含む欧米の市民たちがあまりに酷い現実立ちあがっています。「飢餓と伝染病の危険が迫っています」と悲痛に伝えるアルジャジーラの記者の声が聞こえます。停戦を認めないイスラエルに有効な制裁もできない先進諸国の、特に米国のダブルスタンダードで、世界中が戻れないほどに分断されようとしています。現地では一人ひとりの人間が真実を伝えるために立ち上がっています。爆撃された病院から現地の記者がアルジャジーラに声を届けています。「今病院が攻撃されています。アル・シーファ病院はガザの最大病院です。他に4つの病院が今日同じように攻撃されています。ガザにある36の病院がもう稼働できなくなりまし。発電機もストップし、電力もなくなつたまま39人もの新生未熟児が死を迎えつつあります。医療措置が取れないまま医療従事者ができる限りのことを行って行っています。ここはパレスチナの子供たちの墓場となつて行っています。すでに死体を置く場所さえなくなつてきています。

人々はすでに死を覚悟し、このような中でも子供たちを助けようとしています。既に空爆で病院のビルが壊されました。イスラエル軍によってこの病院も取り巻かれていてスパイパーに狙われており、避難もできません。近くでは病院を護ろうとパレスチナ人戦士たちによる市街戦が続いています。もし私が生きていたら明日また伝えます」と。この記者は、すでに映像を伝える術がなくて、音声だけで訴えています。もしアルジャジーラなどの報道がなかったら世界は素知らぬ顔ができたかもしれません。イスラエルの侵略を支援する米政府は、カタール政府に対してアルジャジーラの報道をもう少しマイルドにするよう申し入れたとのことです。

ガザのアルジャジーラの記者の家族が殺されるケースが増えて行きます。もうどの病院も電源もなく機能停止に陥つた状態で空爆を受け、新生児が亡くなつて行きます。パレスチナの子どもたちの不安に見開かれた大きな瞳に私たちは問われている気がします。今日15日イスラエル軍

ただいまリハビリ中

はどうとう病院に突入しました。

また海外の友人が10月7日にイスラエル軍が音楽祭とキブツで無差別攻撃を行ったことを知らせてくれました。イスラエル紙ハアレツに載った被害者の証言から分析した結果、駆け付けたイスラエル軍が確かめもせず無差別銃撃してイスラエル市民をたくさん殺したようです。このことは後ほど検証されるでしょう。

友人たちに励ましのメッセージを送り、東京でのパレスチナ連帯の映像を届けるのがさやかな私の連帯です。ガザにガソリンはなくなつたけど、ドンキー(ロバ)が活躍しているよ。どんなジェノサイドにも我々パレスチナ解放の意思は燃え盛るばかりだ。いつも希望を捨てないパレスチナの友人たちに励まされます。

ホロコーストは過去のものではない

パレスチナ問題の解決がなぜ長引き、多くの難民が故郷に帰れないのか?とよく聞かれます。問題ははつきりしていません。パレスチナ問題を複雑にしているのは米欧の指導層です。戦後1947年の

パレスチナ分割決議以来、イスラエルによる国際法と国連決議無視を米欧諸国政府が許してきたからです。

欧州ではボグロムやドイツのナチを中心としてユダヤ人の虐殺迫害のホロコーストを起しました。戦後、戦勝国はこの衝撃的なホロコーストに対する「償い」を以てして英国植民地支配から独立を求めていたパレスチナに「ユダヤ人の国を造る」ことを決めました。パレスチナ人には知らせず何の権限も与えぬまま、欧州のホロコーストの責任をパレスチナに押し付け、問題をすり替えてしまったのです。このホロコーストの「償い」という欺瞞的な解決の構図が、戦後の国際秩序にはじめから破壊を内包させてしまったと私は思っています。ユダヤ人問題の解決はドイツをはじめとする当該国が戦後自国でホロコーストと向き合い、ユダヤ人を引き受け共存するべき事柄であったからです。

人工的に作られた国家イスラエルの指導部が国際法と国連決議無視を繰り返す、米国はほぼ無条件に国連安保理の拒否権

を行使して、イスラエルを擁護してきました。現在の「ガザ事態」は、かつての

ホロコーストの被害者であるユダヤ人がホロコーストの加害者となり、人類の危機を作り出していると言つても過言ではありません。欧米の指導層は、ホロコースト迫害を受けたユダヤ人と、シオニストユダヤ人を同一視していますが、ナチの上層部と取引をして、ユダヤ人の選別を行い、ユダヤ人を収容所に送つたのもシオニストであったことはナチとシオニスト指導部のホワバラ秘密協定などの歴史文書で明らかにされています。ホロコーストを行ったナチズムは、シオニズムとコインの表裏をなしています。今ガザの事態に米欧の指導層がイスラエルの側に立ち続けることは、かつてナチズムのユダヤ人迫害を何年も許してきたのと同じ態度であることを、後に歴史は示すでしょう。

米政府が、イスラエルの無法を許してきたことがガザ虐殺に繋がっています。

建国時から振り返ると、第一に1947年に戦勝国の米とソ連が中心になって

パレスチナを分割し、二つの国を造る(国連決議181)と決めながら、イスラエル国家しか作らなかつた国連決議の不履行が始まりました。当時この決議は、トルーマン米政権とユダヤ機関の暗躍でパレスチナの6%ほどの土地しかもつていなかったユダヤ人に肥沃な平野や海岸の56%以上の領土を与えました。94%の土地を持っていたアラブ(パレスチナ)人は43%に減らされ、エルサレム地域は国際管理となりました。イスラエルは47年の決議の前からヨルダン王政と密談してパレスチナ国家を造らせず、ユダヤ国家とヨルダンでパレスチナ領土を山分けしようとして密約しています。イスラエルは

その一方で民族浄化を始めます。既にアラブ諸国が戦争を始める前に、パレスチナ人は虐殺と追放に遭つて、当時のパレスチナ人口の半分が追放され難民となりながら、アラブ(パレスチナ)の国は造られませんでした。

第二に第一次中東戦争において、国連決議を無視してパレスチナの78%を占領したイスラエルを許してしまつたことで

す。その上イスラエルは、占領したまま1949年5月に国連に加盟が認められました。国連決議に違反し、占領を正当化するイスラエルに国連が手を貸してしまつたのです。これも米欧の強力なイニシアチブでイスラエルは占領のまま「平和愛好の独立国家」として国連加盟を日本より早く認められたのです。

第三に追放された75万人以上のパレスチナ難民の故郷への帰還を1948年に国連総会で決議採択しましたが(決議194)、イスラエルはそれを拒否し続けていることです。これは、パレスチナ問題の平和的解決の基礎だとして、国連総会決議の継続として毎年12月には決議を再確認して現在に至っています。今では追放されたパレスチナ人とその子孫の難民は600万人をはるかに超えています。

第四に67年の戦争によってイスラエルはパレスチナ全土とエジプトのシナイ半島、シリアのゴラン高原を占領し、国連安保理決議(決議242)は占領地返還を求めました。しかしイスラエルはそれを無視し、占領したパレスチナ全土、国際

管理のエルサレム、ゴラン高原は既に国内法で併合し今も国連決議を拒否しています。

このように戦後の国際秩序の約束事を無視しイスラエルの勝手放題が通つたのは、常に米国が拒否権を発動してイスラエルを許し続けたからです。占領地や入植地の拡大を国連決議で非難し、停止を求めても、米国の拒否権によって葬られ、イスラエルは他の国々と違って一度の制裁も受けずにきました。この長い建国以来の歴史がイスラエルは何をしても許されるという状況を作り、現在のジェノサイドをも許しているのです。だから逆に言えばこのガザのジェノサイド事態は、戦後秩序の歪みを今こそ取り除く機会でもあります。

ガザを救おう

私もいたたまれず、デモに加わりました。2000人近い人々が銀座をデモし、イスラエルのジェノサイドに抗議し、パレスチナに連帯して声を上げながら歩きました。私も1人の市民として皆ととも



11月19日「パレスチナに平和を！緊急行動」集会後のデモ

に声をあげました。「フリーフリーガザ！フリーフリーガザ！」。泣きながら声を張り上げる外国人の姿に、私もまた「フリーフリーガザ！フリーフリーガザ！」と叫びながらやはり涙が止まらなくなりました。私の涙はイスラエルの攻撃に対する怒り、ガザの人々を案ずる気持ちとともに、もう半世紀以上前からともに戦ったパレスチナの友人たちや仲間たちのことを思い出さずにいられなかったからです。

アラブで、欧米で、ラテンアメリカで、アジアで、市民が米欧支配層の二重基準の欺瞞を見抜いています。「我々の名でガザ市民を殺すな」とユダヤ人自身が声を上げています。アラブ連盟とイスラム協力機構はガザ事態を戦争犯罪と断罪し、イスラエルの「自衛権行使」という西欧の論理を非難し、国際刑事裁判所への提訴を宣言しました。しかしパレスチナの現地の友人たちはアラブ諸国の「アラブハム合意破棄」などのさらなる有効な行動を求めています。

ガザ事態は「第二の独立戦争」と、ネタニヤフ首相が宣言しているように「第二のナクバ」にはかなりません。ガザをイスラエル領土として占領することをネタニヤフはガザの未来として語っています。「パレスチナ人をシナイ半島へ追放する」というプランが10月31日の報道によって暴露されました。この案は、ネタニヤフが初めて首相になった1996年にパレスチナ問題の解決として示したことのある案です。ネタニヤフはこの案が今回りくさされるとすぐ会見し「これはコ

ンセプトペーパーで決定したのではない」と言い訳しました。それでもペーパーの存在を認めたところに次の展開の可能性が示唆されています。イスラエル政府は、徹底的にガザの現状を破壊し、永久占領するでしょう。2005年にイスラエルのガザ撤退を履行したとき先頭で反対し続けた者たちが、ネタニヤフと今の閣僚たちです。

米国は自治政府に管理を任せるようネタニヤフに話したらしく、11日にネタニヤフは、「テロリストに給与を払い、トップ（アッバス議長のこと）が攻撃を非難しない機関には支配させない」とはねつけたとのこと。イスラエルは長期占領の上でエジプトやアラブ諸国を巻き込んだり、服従を条件にパレスチナ自治政府のアッバスらに行政権を持たせて支配する西岸地区と同じ構造で妥協する可能性もあります。しかしこうしたイスラエルのパレスチナ占領を許したままの解決は、問題を繰り返させることに他なりません。パレスチナ人は西岸地区でもガザと同様の激しい弾圧を受け、10月7日以降死

傷者が増え続けています。イスラエルはレバノン国境でもヒズブアラを挑発し危険な戦争状況に至っています。イスラエル右派政権はイランとの戦争を望み、米国を巻き込みたいのです。

イスラエル建国の始まりから国際法と国連決議を無視したまま、米国の拒否権によって免罪され、オスロ合意によって決定したすべてを反故にした、こうしたことが許された結果が現在のガザ事態、第二のナクバです。国際社会が立ち向かうべきは、占領を終わらせるためのテロ国家イスラエルに対する戦いです。

和光晴生さんの突然の死

11月4日、友人から和光晴生さんの訃報が届き、あまりの突然さに言葉を失いました。和光さんは1997年にベイルートで他の4人の仲間とともに逮捕され送還後、ハーグ事件などで無期懲役の判決を受け徳島刑務所で服役していました。詳しい事情は和光さん自身が10月25日に発信した手紙に記されていました。この手紙で、なぜこんな酷い医療措置が行わ

れたのか、と驚かすにはいられません。6年前に鼠経ヘルニア手術を受けており、再度その手術として8月末に大阪医療刑務所へ。それから「主治医が早期癌発見に熱心な方のように初診の折、「まず、いろいろ検査を行い、その結果を見てから鼠経ヘルニア手術をすることにします」と告げられ、それから検査漬けの日々が続くことになりました」と記しています。

検査が続く中で、肝臓や大腸に腫瘍が発見され、その治療が優先され、検査ごとの前日の絶食とか夜間の飲料制限、朝食の後回しなどが50日近く続いて、体力を消耗していったようです。和光さんはそれから10日後に死亡しています。事情は分かりませんが過剰な検査が命を奪ったのではないかと気持ちが塞ぐ思いです。

和光さんは獄に入って以降、私や旧日本赤軍の在り方などを批判をしていますが。和光さんの思いを受け止めきれないまま水別してしまったことが何とも心苦しいです。和光さんはベイルートで最後に会った時、木の三又で作った手作りの

「肩凝りマッサージ器」をくれました。私が肩凝り性なのでちよつと工夫して仕上げたと、サンドペーパーで丁寧に磨いて作ってくれたものです。凝った肩のポイントを太さの違う幹のどれかを使ってもみほぐすのだと実演してくれました。「あ、これいいね。これならハンドバッグにも入るし。ありがとう」と、礼を言っているのも便利に使っていました。

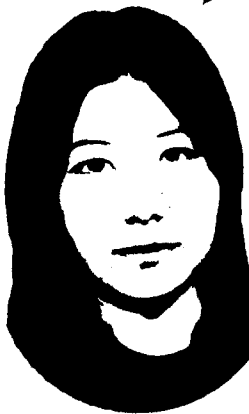
これまで和光さんと長い間ともに過ごしながら私は批判されたことはありませんでした。でも和光さんは逮捕された後、獄で公判などを通して自分の人生を振り返った時、理不尽な思いや言えなかった批判があふれ出てきたのだと思います。和光さんの著作で私への批判が記されています。和光さんの性格ややり方の違いをもっと理解していたら……と、彼の著作をよんで悔やむことがいくつもありません。語り合う機会を得られないままに先立たれて……。私がつと彼を知ろうとしていたら、学び、ともに対処できたのに、当時の自身の未熟さを振り返っています。合掌

(11月15日)

ただいま

SHIGENOBU HISAKO'S

第15回



重信房子

パレスチナ人民連帯国際デー

イスラエルの空爆が休止していた11月29日は、「パレスチナ人民連帯国際デー」でした。この日、世界各地でパレスチナ人民連帯が呼びかけられました。「11月29日」は1947年に国連が「パレスチナ分割決議」を採択した日です。このパレスチナ人民連帯国際デー創設が国連総会で決議されたのは1977年です。決議の理由は、国連が2つの国を造ると決議したにもかかわらず、いまだにイスラエルの占領が続き、それが実現

していない。パレスチナ人が民族自決とパレスチナ国家建設を求めているにもかかわらず、その権利が実行されていない。この深刻な状況に対する関心と連帯を世界に呼び起こすためでした。国連総会は、パレスチナの人々の不可侵な民族自決の権利を支持し、パレスチナ問題の解決に向けた国際社会の努力を促すことを目的として11月29日を特別な日としました。この日は、世界各地ばかりか、国連本部や国連事務局でも記念行事を行います。

このように1970年代は社会主義国、非同盟諸国など国際社会がイスラエルの占領をなんとかやめさせようと努力した時代で、1975年には「シオニズムは人種主義である」と非難決議もしています。市民が政府に要求し、国家レベルでもそんな決議ができた時代です。このシオニズム非難決議は、東欧・ソ連崩壊後、湾岸戦争を経た1991年12月、米政府の提案で撤回決議がなされてしまいました。でもこの国際連帯デーは生き残っています。

2023年も、世界各地でパレスチナ人民連帯の活動が広がりました。日本でもシエノサイドに対して人々は立ち上がり、各地で連帯集会やデモが行われました。広島では原爆ドーム前でイスラエルによるパレスチナ人への攻撃の犠牲者追悼集会が行われ、参加者は白い布に無数の赤い涙を描き、今この瞬間も命が奪われているパレスチナのために涙を、と連帯を呼びかけました。市民ばかりか、観光に来た外国人も足を止め、絵筆を手にもった赤い絵の具で、血の涙をいっぱい描き

続けたと友人が話していました。大阪ではこの日、米総領事館前で抗議デモを行ったと友人が映像を送ってくれました。イスラエルへの支援を続けるアメリカに對する抗議のデモ行進をし、「虐殺をやめろ」「パレスチナを解放しろ」とパレスチナの旗や横断幕を手にししました。30余りの団体による関西ガザ緊急アクションが主催したものです。登壇した日パレスチナ人が、「どうか私たちの命を土地を救うためにあなたの政府に働きかけてください」と切実に訴えたそうです。奈良でも東京の友人たちに呼応してスタンディングで連帯しました。九州でも連帯行動が行われました。

新宿中央公園の集会で

私も東京・新宿のパレスチナ人民連帯国際デーの集会とデモに参加しました。新宿中央公園の街宣車に舞台が設けられ、登壇した若者たちの真摯な訴えに心を動かされました。

松下新士さんという方が振り絞るような思いで語りました。「死者だけで2万

360人、傷病者は倍以上。比べることはできないけれど広島原爆以上の火薬量が既に投下され、死者や行方不明者が東日本大震災の死者、行方不明者の数をはるかに超えてしまっています。それでも停戦は続かないような、本当に本当にひどい状況になっています。どうか一人ひとり皆さんの力を貸してください」と。ニューヨークのデモに参加したというあいささんが語りました。「たまたまこの日本という国に生まれた。たまたまパレスチナに生まれた人たちのように、虐殺、占領の下にいるのではない。私が皆さんに訴えることはほとんどない。単純なことなんです。この歴史的大虐殺を見ながら何もしないとどうやっていけるか、という人たちがここに集まっています。私が訴えたいのはここにいない人たちになんです。どうか目を覚ましてください。今の状況で何もしないとどういうことなんだろう？ この場にはいない人に訴えます。日本も加害者ではあるんです。加害者であった歴史、この国の歴史を考えた上でやらないといけないことがいっ

ぱいあるんです。だからこの日本の中で生きてる私たちは、こんな時代に普通に生きていくんではダメです。この虐殺を見て自分の生き方をすごく問い直しています。みんなにも問い直してほしいです。何かを買ったり、ただおいしいものを食べたり、ただ生きてるだけでいいんですか？ 私たちの行動の足下で、人々が死んでいっている。食べられなかったりして。何もできないこの世界が絶対にこれでもいいと思いません。絶対この世界を変えていかなければいけない。一緒に怒りましょう。本当にこの世界を変えましょう。苦しめられている人たちが自由になつてこそ本当の自由になること、パレスチナの人々が解放されることが私たちの自由だと信じています。皆さんこれからどんな変えていこう、お願いします。若い女性が泣きながら訴え絶叫してました。溢れる心情吐露に本当にその通りだと思えました。

それからガザで生まれた女性ハニさんがガザからの手紙を読み上げました。その一部を記します。「ガザについて語

つてと言われて、いつもならすぐ書けるのに言葉がないです。今生き延びている残虐さのせいかもしれません。ミサイルによって隣人の家が壊され、私の家にも破片が飛び散ったにもかかわらず、私たちの家族は生き延びたからかもしれません。75年以上にわたって私たちに對して行われてきた国家を挙げたテロリズムの最中、私たちの正義を主張し、語り続けていても誰一人答えてくれないからかもしれません。友よ。昨日はイスラエル占領軍がガザの病院を爆撃して、500人以上が殉教しました。殉教者たち亡くなった者たちは、バラバラに切り刻まれて肉の山となりました。……病院の瓦礫の傍で、年配の女性が看護師に乞いました。「若い人よ、そこに転がっている手を私に渡して下さい。指輪でわかったのですよ。これは今朝、私がニュースを見るために椅子に座るのを助け支えてくれた私の娘の手です。今朝テレビをつけてくれた手です。この子は家を出る前に私に挨拶をして手にキスをしてくれました。いつも私を抱きしめて、優しく肩を抱いて

ども6150人、女性4000人、医療従事者198人、国連職員が112人殺され、ジャーナリストらは70人が殺されているとガザ保健省が明らかにしました。既に180万人の人々が自宅を追われ、赤ちゃんが10分に1人殺された計算だという現実。ガザばかりか、西岸地区でも10月7日から逮捕者が増え続け3400人の市民が逮捕拘留され、獄中者は7000人を超えたということです。そのうちの2070人が「行政拘留者」です。「行政拘留」とは、イスラエル政府が、こいつはけしからんと考えたパレスチナ市民を逮捕し、起訴状もなく裁判もなく獄に閉じ込めることのできる制度です。このイスラエルの行政拘留制度は、英国の植民地支配時代の法制の一つで、第二次大戦中に制定されたものを、イスラエルはパレスチナ人に適用しています。裁判や起訴なしに行政拘留命令を発して最長6カ月の拘留を認め、期間は更新されるので、何年でも裁判もなしに幽閉できるものです。国際法に反する人権侵害だと人権団体が批判している野蛮な措置で

くれました。いつも髪をとかして爪を切ってくれた手です。若い人よ。その手は私の日々の最後の力の源でした。私の子どもに最後のキスをさせてください。そうすれば私はこれ以上、必要とせずに済むから」と。友よ、これ以上何を書けばいいのかわかりません。そしてこの地球上の他の住民たちのように、ガザから自由に往来できるようになった時にお会いしましょうと締めくくられた手紙を読む登壇者も聴衆も涙をこらえていました。これが物語ではなく、同じ地球の一角で今起こっている同時代の人間同士の分かち合いだからです。

その後、新宿の中心に向けてデモが始まりました。「ストップ・ストップ・ジエノサイド」「イスラエルは恥を知れ」「アメリカは恥を知れ」「岸田は恥を知れ」「フリー・フリー・ガザ」のプラカードを掲げ、パレスチナ国旗を掲げ夜の新宿駅南口から歌舞伎町へとデモが進みます。沿道から手を振る人も多い。

イスラエルのジエノサイド
—解放された人々の声

す。「人質交換」で解放された若者や女性たちが受けたイスラエルの獄中の精神的、物理的拷問の酷さをアルジャジーラが報道で告発しています。

釈放された少年の1人、ナザール少年は、今回のガザ決起戦が始まってからイスラエルの看守による虐待はひどくなつた、と記者に語つたということです。棒で頭を叩かれるので両手で頭をかばつたので手がおかしくなつた、と。指が曲がらないので記者は少年を外科医に見せたところ手の骨が折れていたという診断書を受け取つたといいます。このアルジャジーラの記者からのインタビューに対してイスラエルの広報官は少年が嘘をついている、と反論したそうです。友人の岡本公三さん（1972年リッダ空港作戦に参加。イスラエルで逮捕され捕虜交換で1985年帰還）が一日中、両手両足を鎖につながれて犬のように食事をさせられ、垂れ流しを余儀なくされたという現実を知っている私には、イスラエルの獄中処遇の酷さは想像できます。イスラエルは西岸地区で拘束した未成

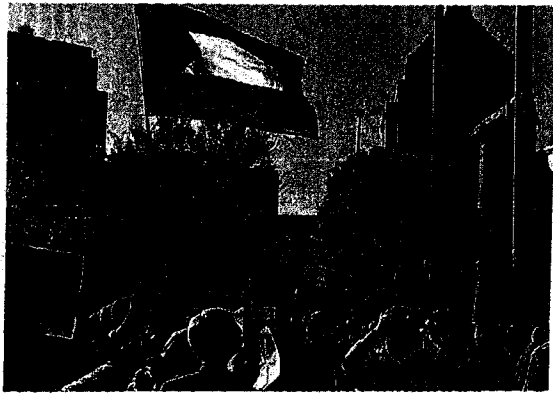
11月24日、ガザの虐殺・ジエノサイドが10月7日以来初めて止まりました。つかの間、親族の遺体を探すために、破壊された自分の家から食料を探すために、危険のなか北上し、たちまちイスラエル兵に銃撃された知人のことを友人が語っていました。「人質交換」が始まったのは国際世論がジエノサイドに黙っていないからです。世界各地の人々の抗議に、当初はイスラエルの戦争開始にフリーハンドを認めた米バイデン政権もイスラエルに圧力をかけざるをえなかったからです。ほんのわずかな間に危険を省みず家族や友人のために必死に瓦礫を素手でどけているガザの人々を見ると、苦勞なく食事し、寒ければ洋服を取り出して着、自分の意思で車にも電車にも乗って用事を済ますことができる日本人のささやかな生活すら、こんなに普通に生きていていいのかといたたまれない気持ちになります。

地中海の海辺のあのガザで10月7日以降攻撃休止までに、1万5000人以上が殺され、その数倍の人々が負傷し、子

年のパレスチナ人の数をほとんど報道しませんが、12歳の子どもを含め毎年500〜700人を軍事法廷で裁判にかけています。最も重い罪名は「投石」で懲役20年の刑だそうです。大人が、子どもをこんなふうには扱えるものかと思わずにいられません。

こうした人々の一部が今回「人質交換」で西岸の家族や友人のもとに帰ってきました。ハマース人気は高まるばかりです。イスラエルの民族浄化政策が住民をハマース支持に向かわせているのが現実です。

一方イスラエルの各メディアが報じたところによると、ハマースが解放したイスラエル人捕虜の話では、ハマースが彼らを丁寧に扱い、暴力や侮辱を受けるようなケースは全くなかつたということです。シオニスト系メディアのチャンネル13の軍事担当記者はこの件に関して、「解放された捕虜の何人かに連絡を取り話を聞いたが、彼らは、ハマースが同じ地域の捕虜を一緒にして、より安心した気持ちでいられるように配慮していたと語つ



12月10日の世界人権宣言記念日に国会正門前で開かれた、パレスチナの人権とイスラエル糾弾の集会

生活を伝えるメールが集会で幾つも読み上げられました。また在日パレスチナ人たちが、イスラエルが繰り返す犯罪の歴史を語りました。

この日、ネタニヤフ首相は、ガザ攻撃目標をハマースのガザ責任者ヤヒア・シムワール逮捕と具体的に公言しハマースには投降を呼びかけました。国際社会の非人道的虐殺批判を逸らし「テロとの戦

た」。さらに、「捕虜らはいかなる暴力や侮辱も受けていなかった。ハマースは彼らに、できる限り食料、鎮痛剤、常備薬を与えるようにも努めていた」と続けました。イスラエル人捕虜たちは、互いの傍にいて話をしたり、ユーチューブの番組を見るような日常生活の行動も可能だったと。同局の専門家の一人は「解放されたイスラエル人捕虜の話聞き、恥ずかしく感じた」と述べたそうです。

再び止まらないジェノサイド

友人から干し柿を作ってみたら、と15個も渋柿を頂きました。明日、休戦期限が切れるけれど、ネタニヤフは侵略を再開するだろう。そんなことを考えながら、干し柿に初めて挑戦しました。昔々、近所のおばあちゃんが一つひとつ渋柿の皮を剥きながら、戦争の時代には食べるものがなくて、渋いのは分かっているのに待たずに、干してある渋い柿を食べたことがあると話しながら、あなた達が大きくなったら戦争みたいな馬鹿なことをする大人には絶対騙されてはいけないよ、

と話していたのを思い出しながら私も一つひとつ柿の皮を剥きました。あのおばあちゃんは、今の私より若かったのだからと改めて自分の老齢に驚きます。一つずつ皮を剥き、辛口の酒に一つずつと浸して消毒し、紐で括ってペランダに吊るしました。吊るしながら空を見上げると青い空にレースのように美しい下弦の月を見つめました。獄にいた時には月が見たくて月輪カレンダーで計算しながら扉の隙間を通るほんの短い間に月見をしました。ガザのジェノサイドに気が取られて月を見るのを忘れていたように思います。ちょうど今もまだ、ガザもパレスチナもレバノンも、青く高くどこまでも雲一つない空が広がっているだろう。美しい昼の月を見ながら、青空に並び映える干し柿を見上げ、ガザと西岸地区の虐殺の拡大を案じます。

パレスチナ人民連帯国際デーが終わったばかりの12月1日、日本時間2時過ぎ、アルジャジーラ臨時ニュースが「イスラエル軍が11月29日に、休戦の延長は無い。戦闘を再開する」と今声明を発しまし

い」に世論を誘導すべくテーマを設定したのは明らかです。それでもハマースを根絶やしにすることができません。ハマースの潮流はイスラエルの蛮行の堪えがたい歴史が育てた住民自身だからです。

汚職で起訴されているネタニヤフは、首相免責特権を得るために司法改悪を企み、超右派と組むしかなくなつてやつと組閣しました。このネタニヤフ政権はヨルダン川東岸を含むパレスチナ全土を「エレット・イスラエル(イスラエルの土地だ)」と主張した「修正シオニズム」の始祖ジャボチンスキーの信奉者たちの集まりです。ジャボチンスキーは、「鉄の壁戦略」を提唱したことで知られています。それは、パレスチナで「ユダヤの軍事力を絶対的優位に立たせることが国家建設だ」とする考えであり、アラブ人がユダヤ人のあまりの強さに、ユダヤ人を排除するという望みを放棄した時だけ平和共存が成り立つとし「そのような合意に至る唯一の道は、パレスチナに『鉄の壁』、すなわちどんな場合でもアラブ人の圧力にびくともしない権力を我々が確

た」と伝えました。アルジャジーラはその後、ハマースのハムダン代表との電話インタビューを伝えました。

「休戦の解決は本場の解決にならない。本場の解決は、イスラエルの占領を終わらせるためのメカニズムを作り出すことにある」と答えていました。「エジプトやカタールをはじめ全ての仲介者とあらゆる形で対話を続けてきた。この休戦に努力してくださった方々に感謝する。しかし再びの侵略がすべてを中断させた。わが人民の利益のために、占領と侵略を終わらせるためにあらゆる努力を私たちは傾け続けます。しかしアメリカ政府はこの戦争を終わらせるために、イスラエルに対する強力な圧力をかけていません」と述べました。このインタビューが終わらないうちから再開された激しい空爆で、もう何十人も殺されました。

12月10日、1948年に世界人権宣言が発せられた日、国会正門前でパレスチナの人権を訴え、ガザのジェノサイドを糾弾して約1500人の市民が集まりました。ガザからの哀しく厳しいリアルな

立して初めて得られる」という考えです。ネタニヤフらは西岸からもガザからも、パレスチナ人を追放しパレスチナ全土を支配することを長年考えてきた者たちです。パレスチナ人のシナイ半島への追放か、占領支配の継続を描き続けるでしょう。イスラエルの国連や国際法無視を今日まで増長させたのは、国際社会、特に米国政府のイスラエル政策です。安保理で拒否権を發動してイスラエルの建国から75年以上にわたる国際法、国連決議無視を擁護してきた結果が、このガザ・西岸地区に対するジェノサイドです。ガザ10.7以降でも10月、12月と米国は停戦決議案を拒否権で擧っています。米国など国際社会が変わらない限り、ガザ占領ジェノサイドの長期化は避けられません。むしろ私は、ネタニヤフらリクードをはじめとする右派が米政府のネオコン勢力らと呼応し、米軍を巻き込んでイランに戦争を拡大させる危険と、ブッシュ時代に狙った中東を構造的に「民主化」しようとする破壊の再現を危惧しています。



京都での1月13日の抗議行動

た。急ぎパレスチナの歴史と現実を知ってほしいと切実に思いました。「ハマスのテロ」の情報が席捲し、そうではなくて、75年以上にわたる弾圧と占領が臨界に達したこと、ハマスだけではなく、全解放勢力が立ちあがったこと、イスラエルの攻撃はハマスを口実にパレスチナ住民に対するジェノサイドだと訴えたかったのです。欧米帝国主義から被害を被ったパレスチナの歴史を伝えたい、それで急ぎ80万字の文章の圧縮と修正から校正と忙しくなっていました。ちょうど校正の締め切りが迫り、年末年始を友人

の協力を得ながら一緒に校正や年表と地図づくり、写真選び作業に追われて過しました。その合間に友人の計らいでお寺にお参りに行きました。昔は近所の人たちは夜の12時前にNHK紅白歌合戦が終わると、誘い合ってお寺にお参りしたり鐘をついたりしたものです。子どもの頃は百八の鐘の音を聞きながら我が家の営んでいたお店を閉めて新年を迎えました。大晦日は近所の人それぞれでツケで買った代金を払いに来て「良いお年を」とあいさつを交わしました。父は帳面をめくりながら、あのうちは失業したからお金はないだろう、このうちは子どもの給食費も払えないと言っていた、などと呟いて掛売りの取り立てに行きません。うちだって貧しいのに、と子ども心に気にしたものです。でも今から考えると父らしくってそれで良かったのだと思います。「金の多寡で人を見るような人間になるな」とよく子どもたちと言っていた父でしたから。年末になると、あの子ども時代のささやかだけれど興奮しながら夢いっぱい過ごした年末

年始の光景が浮かびます。友人と行ったお寺でお参りの後、友人の母親への墓参りも兼ねて見晴らしのいい高台の間から初日の出を見上げて祈りました。
パレスチナを語る
昨年は、人々の前で話をさせて頂く機会が何度ありました。
2023年は、パレスチナのオスロ合意からちょうど30年目に当たり、5月のリツダ闘争51周年集会でスピーチをしました。その後、2022年に出所後初めて挨拶した京都の反戦集会と同じ円山公園反戦集会で2023年10月16日にスピーチしました。この日は既にガザからの洪水作戦とイスラエルの無差別空爆、虐殺が起きていたので、パレスチナ情勢について語りました。その中で自身の思いも語りました。「わたしは、パレスチナの友人たちと共に闘い、生と死の命を日々見つめる中で生きてきました。私には戦いの中で、民間人を巻き込み危険に晒し被害を与えた過ちも犯してきました

ただいま

SHIGENOBU FUJISAKO'S

ハビリ中

第16回

重信房子



新年をむかえて

獄から出て1年半を過ぎ、体調も随分よくなりました。腸閉塞、癩痕ヘルニアなど手術の後遺症は完治しないので、食事や生活のし方で悪化しないように注意しています。

いつも新年は静かに過ごしたいのですが、今年は新年を慌ただしく迎えました。ガザ、パレスチナの厳しい現実がそういう思いにさせたとも言えます。

作品社から出版される『パレスチナ解放闘争全史』の校正作業に年末年始、追

われてしまったためです。獄にいた時に癌の手術を繰り返したこともあって、生きていく間に自身の経験を率直に記録しておきたい、と60年代の学生運動の経験と、パレスチナの歴史とそこでの経験を書き続けました。その一部が去年出版した『はたちの時代』（太田出版刊）です。パレスチナは日本では地理的に遠いこともあってあまり知られていないし、解放闘争主体の側に立って共同した経験の側からパレスチナの歴史と解放の闘いの

記録を残したい、と獄で学習、分析しつつ記録としてまとめました。自身が見聞きしたこと、1982年のPLOのベイルート撤退など、体験した状況を記憶している限り記し、資料や書籍で前後の歴史を補ったりして書きました。獄にいたからこそできた約80万字のその記録はネット上で公開して、知りたい人が読めればいいと思っています。ところが日本には解放主体の側からの記録がないので出版したいという企画が生まれ、作品社での出版が決まりました。

まだその作業を始めないうちに昨年10月7日のガザ事態を迎えました。ゲテールス国連事務総長が10月14日「ハマスによる攻撃は真空中で起こったのではないことを認識することも重要だ。パレスチナの人びとは56年間、息の詰まるような占領下におかれてきた」と発言して、イスラエルの国連代表から辞任を要求されましたが、日本では、その歴史が知られていないのです。そのため10月7日とその後の事態だけが切り取られて話されていることが多く、強い危惧を抱きました。

重信房子

た。だから自分たちの反省としても今こそ訴えたい。どんな戦時下でも武器を持たない人の命を奪うことは許されない、と。どの、誰の命も奪い合ってほしくないのです」と。

イスラエルの占領を国際社会がなぜ許すのか？これが歴史的にも現在のにも問題の要諦です。

命がけで情報を伝える現地ジャーナリストと報道機関のおかげで、イスラエル占領軍によるジェノサイドが白日の下に晒され、無差別に殺されるガザの住民の現実がリアルタイムで日本にも届きます。なぜこんな事態が許されるのか？パレスチナについて語ってほしいという要請を受けて12月に関西と東京でパレスチナ問題について話す機会もありました。

京都では「ルネッサンス研究会」主催の学習会に130人ほどが参加して下さり、椅子も足りず、立っている人、床に座って聞いて下さる人もいました。私は「ガザで、西岸地区で日々殺されているジェノサイドの現実、本当に人類の危機です。こんなことが許されてはならない、

という抗議と連帯の意思として世界の抑圧、虐殺された人々にも思いを馳せながらパレスチナで虐殺された人々への黙禱を捧げたい」と述べて、会場に集まられた方々と共にガザで今苦しんでいる人たちへの思いをひとつにし、そして講演を始めました。

日本に届くパレスチナ情報は米国を中心とする情報のバイアスがかかっていて、「ハマスのテロ」「テロとの戦い」のように語られているが決してそうではないと例を挙げながら説明し、パレスチナ問題発生の歴史を語り、またパレスチナ解放闘争に参加した側の問題や「オスロ合意」の現実を語りました。30年前、私が生活や活動をともにしたパレスチナの友人たちがオスロ合意に反対し危惧したように、イスラエルは占領を続けたまま国際社会に受け入れられてしまったことを語りました。質問も活発で、「なぜ米国や西側社会はあのようにイスラエルの虐殺を許すのか？」「解決の着地点をどう考えているのか？」「日本はどうすべきなのか、国際社会はどうすべきなのか？」など、時間

いっぱいに語られました。質問は示唆に富み、こちらも心から想いを述べました。第2次大戦後、戦勝国はユダヤ人の国を造るというシオニストの要求に沿った解決を図ったこと、つまりユダヤ人に対するホロコーストが明らかにになるとドイツをはじめとする欧州当該国が償うべきユダヤ人問題の解決を、英国植民地だったパレスチナに転嫁し贖ったこと。ここに植民地主義を引き継いだ戦後秩序の偽善が内包され、それが中東を常に不安定にしてきたことを語りました。1947年に、国連総会は2つの国をつくると決議しながら、パレスチナ(アラブ)国はつくられませんでした。シオニストはパレスチナ人を追放し、「イスラエル」をつくりパレスチナの全土に至るまで占領して現在に至っていることを話しました。

この国際法や国連決議無視のイスラエルに対し、米国が拒否権によって護ってきたことが、イスラエルは何をしても許されるという現実をつくり、75年以上にもわたって占領と入植拡大を続け、ついにはパレスチナ人の民族浄化が極限に達

したことが今回の事件の発端であること語りました。そして何よりも、イスラエルの占領をまず終わらせることなしに平和も、和平交渉も進みえない事態を語りました。占領をやめさせることはイスラエルという国をつくった国際社会の責任です、と。

東京ではたんぼ舎で浅野健一さんが主宰している講座の一環で、パレスチナ問題を語りました。ここでも現実に触れつつ歴史を語り、占領とはどのような状態なのかなど、熱心にお話を聞いていただきました。たくさんの真剣な質問を頂き、私もとても楽しく語り合うことができました。浅野さんはがんの手術で声帯を失った後も果敢にジャーナリスト活動を続けておられ、私はその意志と努力とコミュニケーションの工夫に感銘をうけ、私も努力と工夫を奨励される思いでした。私は講演で人々に語りつつ、やはり20年以上上獄にいた後遺症で発声が難しくなっていると思いました。獄は自由に自分の意思を表現する主体的行為は許されない受動性を強いられる服従の社会です。

20年以上指示なく話すことを禁じられた獄生活で話をする機会も失われました。そのため、舌や喉が退化してしまっただか話し続けると舌がもつれてきて言葉がうまく出てこなかったり、年齢もあるかもしれないませんが息切れがしました。長い間話す自由がなかったということはこのように言葉を奪っていくものなのだ改めて思いました。話すことは嫌いではなく、弁論をやった若い時代もあったのですが。

でもみんなの温かい眼差しの中でパレスチナのこと、その正当性と正義を思い切り語る機会が与えられたことはとても嬉しいことでした。今後とも喋る機会を大切に、人々と直接向き合って語れる場に参加していきたいと思っています。

娘と過ごした誕生日

パレスチナの洪水作戦に続くイスラエルのジェノサイドのあまりの現実、他のことを書くスペースもありませんでした。一方でささやかな生活の楽しみもありました。去年の誕生日は娘のメイと2

人で過ごしました。

メイが友人と行ったことがあるという新宿の食べ放題のお寿司屋があり、少し高値だけど誕生日だからおごってあげると言うので、2人で出かけました。メイは私が獄中にある間に日本国籍を取得して初めて帰国し、大学院に通って博士課程を取り、衛星放送のニュースキャスターやジャーナリストとして長く活動してきたので、日本をよく知っていていろいろ教えてくれます。出所してからはスマホの使い方からパソコンその他までいろいろ教えてもらいながら過ごしてきました。スマホのカメラだって大通りで初挑戦した私が、小さいスマホの穴から覗いたら、メイが跳んできて「反対！反対！裏表が逆よ！」と大笑いしていました。そんなことが多々ありながらのりハビリ中の私、だいぶ社会に慣れてきました。

かつてメイと一緒に暮らせなかったので仕事の合間を共にする機会を楽しんでいます。時差のある海外の仕事が多いメイから、時々パレスチナ問題の詳しい情



1月13日の東京での抗議行動

するのはイスラエルですが、日本ではヒズブッラーが攻撃したようにニュースが流れます。

イスラエルの新聞ハアレツ紙が暴露したネタニヤフ政権の内部文書（ガザの北から南へとパレスチナ人を追いやってシナイ半島にテント都市を建設して住ませ、そこにパレスチナ永住都市を建設するという秘密文書。ネタニヤフ首相は「ただのコンセプト・ペーパー」と言い訳した）の通りに進めているのか、ガザをパレスチナ人が住めないように破壊しています。

国家安全保障相のベングビールは住民のガザからの移送とユダヤ人入植地の再設営を訴え、財務相のスモトリッチは1月1日のシオニスト党の会合で、イスラエルの安全のためにガザを永久に統治しユダヤ人入植地を建設すべきだと述べています。これに対して、イスラエルの情報機関シャバックの長官を務めたアミ・アロンは、「自分たちのパレスチナ政策が間違ってきた。特にネタニヤフの強硬作戦が逆にハマスを巨大化させた」と述べ、これまで「2国家共存の実現の阻止、イスラエルの隣にパレスチナ国家誕生を阻止することなら何でもする」とし、ハマースとファタハの分断も都合が良いと考えたが間違っていた、と述べています。ハマースとファタハはどんなに分断しても、少なくとも占領を終わらせるといふことに関して、彼らが分断されることはないのだと。だから結局痛みは伴うけれども2つの国家と言う政治的地平をパレスチナ人に示すことで2つの国の共存を実現させなければ終わらない。和平交渉のテーブルを準備するための和平の機運は国際

社会から生まれるべきであり、バイデン大統領がリーダーシップを発揮するべきだ、とアロンは述べました。

バイデンも選挙を睨み、民主党内外の批判を受けて1月18日、「2国家案」を言いだしましたが、ネタニヤフは拒否しました。でも「ガザ攻撃終結後もネタニヤフが首相であるべき」という意見は、イスラエルで15%しかないそうです（1月18日BBC報道）。

非現実的な「ハマース壊滅」という歯止めのないジェノサイド。ネタニヤフは汚職で裁判を控え、ハマースを壊滅させるどころか自らの墓穴を掘っているように思えます。南アの国際司法裁判所への提訴を支持するよう日本政府に求める市民の力は小さいけれど、粘り強い働きかけと、そして国際的な各地のBDS運動（イスラエル占領地の製品B boycott、D investment 引き上げ、S boycott）の広がりを願っています。

パレスチナ 落暉に燃える地中海
ガザの大地を血色に染め上げ

(2024年1月20日)

報なども教えてもらえるので私も助かります。

誕生日の日、2人でおしゃべりをしながら新宿駅を出てオカダヤでアクセサリーやヘアピースを覗いたりしてから、お寿司店に着きました。ウインドウの前でどのコースにしようかとメニューを見てみると、張り紙に、「お寿司のネタだけ食べてお米の方を残すのは不可。その分は代金を頂く」などと書かれていたのに驚きました。

食べ放題だからといって上に載っているネタの魚などを食べ散らかしてお米の方を食べない人がいるのでしょうか。そんな張り紙を見て、なんだかげんなりしてしまいました。

もしかしたらお米の方はおにぎりみたいに大きいかもしれないね、などと言いながら結局やめて近所をぶらぶらし、「しゃぶしゃぶ食べ放題」というお店に入りました。海外と獄が長い私はしゃぶしゃぶを食べたことがないと言うと、メイも驚いていました。でも、しゃぶしゃぶ食べ放題なのに焼きそばがあったり唐

揚げがあったり、いろいろなものがありました。こんな風に変わったんだな、と歌舞伎町の辺りをキョロキョロと徘徊しながら、昔はこうだった、あーだったなどと、もう半世紀以上前の話を娘に披露しては歩きました。こんな時間が取れるとは獄にいた時は考えられませんでした。嬉しい一日になりました。

希望になるか、
ゲームチェンジャーになるか

南アフリカ政府はイスラエルのパレスチナ人に対するジェノサイドを止めるために、国際司法裁判所にイスラエルを提訴し、公聴会が1月11日始まりました。アバルトヘイトを経験してきた南アの提訴に希望を託そうと世界中が注目しています。私がまだ中東にいた時代にネルソン・マンデラがパレスチナを訪れて演説したのを思い出しています。マンデラは、辛い被害を被ったパレスチナの人々が和平を受け入れようとする寛容さを称え、最後の手段としての武装闘争に理解を示し、「パレスチナの自由なしに我々の自由はない」と語っていました。すぐに70

を超える国々と、世界中の1000を超え大衆運動、政党、労働組合、その他の組織が、「1948年のジェノサイド条約に署名したすべての国は南アフリカを支持するよう」求めていきます。「この提訴がゲームチェンジャーになるか？」と世界の報道は注目しています。

2日目の公聴会でイスラエルはジェノサイドを認めず「自衛権」を主張しました。このイスラエルの明確なジェノサイドがジェノサイドとして認められないなら、人類は歯止めを失うでしょう。日本でも1788地方自治体議会のうち、昨年未までに211議会がイスラエルの即時停戦を求める決議をしています。

しかし、今年になってもイスラエルの蛮行は変わらず、むしろ強硬にガザ、西岸で集団虐殺と弾圧を広げ、レバノン国境地帯でも緊張を高めています。ベイルートでハマースのリーダーらをミサイル攻撃で殺害し、続いてレバノンの政党であるヒズブッラーの幹部まで暗殺しました。今日はシリアにまでイスラエルが空爆して戦場を広げています。いつも先に挑発



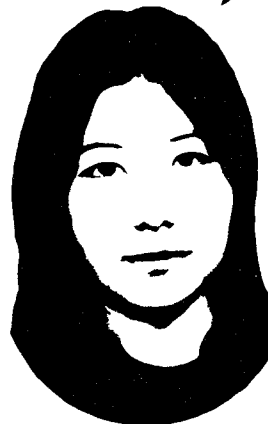
2月18日、ラファ地上攻撃に抗議し、新宿に集まった人々

ただいま リハビリ中

SHIGENOBU FUSAKO'S

第17回

重信房子



ネタニヤフ首相のラファ 地上攻撃宣言に抗議して

2月14日はパレンタインデーです。人々にとって楽しい日かもしれません。でもアラブ世界はそれどころではありません。ガザの各地で攻撃を受けた住人が避難し140万人以上に膨れ上がった国境の町ラファに、ネタニヤフ首相が空爆ばかりか地上戦攻撃を宣言したからです。国際司法裁判所(ICC)からジェノサイドを阻止するよう暫定措置命令を受けたネタニヤフ政権は、内外の批判の増大に政権の延命をかけてますます凶暴に

なっています。ラファ攻撃宣言にイスラエルの「自衛権」を支持してきた米欧の政権もさすがにそこまで容認できず、「人道的」見地から憂慮や反対を訴えはじめました。

世界各地の市民たちはジェノサイドを止めようと必死です。日本でも「ラファ大虐殺を止めろ! イスラエルに制裁を!」とパレスチナに連帯する人々が訴えています。この人々はまた、イスラエル最大の軍需企業エルビット・システム

資協定の凍結などの制裁を行うように要求します。ぜひご参加ください!」と呼びかけています。

パレンタインデーにダイ・インの呼びかけのメール。その落差、ミスマッチの世界の現実(なま)に溜息をつきながら、生きていくからこんな経験もできるのだなあと思感します。パレンタインデーは不要かもしれないけれど、普通の喜びのある暮らしをガザ住民から奪っているのは国際社会で、私たちもその一員だとしみじみ思います。占領と植民地支配、封鎖、空爆、ジェノサイドのガザの歴史を考えると、

そこに住む人々の痛みが身に沁みます。

ネタニヤフ政権は国際司法裁判所のジェノサイドを阻止するよう命じた2024年1月26日の暫定措置命令を拒絶し、対抗して新たな情報戦を仕掛けました。UNRWAの職員が10月7日の洪水作戦に関与したとするキャンペーンです。この調査が行われないうちから米政府はUNRWAへの分担金の支払いを中止しました。日本もそれに乗りました。しかし、たとえ何人、何十数人の職員が作戦に関与したと立証されたとしても、それはUNRWAの機関とは関係がありません。それを理由として拠出金を断つことは、UNRWAのみならずパレスチナ人のジェノサイドを許さない国際的な政府機関、市民たちへの政治経済的な報復であり集団懲罰です。

UNRWAは、ガザ地区で1万3000人の職員を雇用し、ガザの230万人に不可欠な教育、福利厚生にわたる人道支援を行っています。こうしたUNRWAへの拠出金を停止することは、ジェノサイドに遭いながら生きようとしている

命を見殺しにすることです。UNRWAの清田保健局長は、「拠出金停止はガザの住民にとって死刑宣告になっている」と述べています。

イスラエル政府はガザで起きつつある飢餓や感染症の危機を知らないはずはありません。イスラエルの狙いは、UNRWAの資金を断ち、国連機関としての正当性を奪い、UNRWAの役割である「1948年の難民」支援を終わらせることにあります。UNRWAを閉鎖し、昔からイスラエルが主張してきた難民の居住国への同化によってパレスチナ人の帰還の権利を奪い無効化し、パレスチナ難民問題を終わらせようとする魂胆(こんたん)です。国連のグテーレス事務総長は、「イスラエルの指導者たちは、パレスチナの人々と戦っているのではなく、ハマスと戦っているのだと繰り返しています。もしそうであるなら、ガザで約2万8000人が死亡し、人口の75%が避難し、近隣地域全体が破壊されたと言われるような方法で、どのように軍事作戦が行われているのか、私には理解できない」と

SHIGENOBU FUSAKO

述べています(2月9日アラブニュースのインタビューで)。イスラエルがラファに侵攻することは、エジプト側との平和条約(1979年)の合意に抵触していません。しかしエジプトの方針はネタニエフの構想と実は一部重なっている可能性もあります。「我々は安全な地域や施設を提供する意図はない。しかし、……もし攻撃が行われるのであれば、無辜の市民に対する支援は提供する用意がある」と17日、エジプト外相が述べています。エジプト側国境付近の土地を平らにならしている衛星写真も撮られています。シナイ半島にテント都市をつくり、ガザからパレスチナ人を追い出すというネタニヤフ・シナリオは、ラファを地上攻撃するところまでできました。国際社会の有効な制裁圧力、ネタニヤフ政権退場を求め続けねば、と思います。

イスラエルという国の本質

イスラエルは一般的な「国民国家」と考えることができません。イスラエルという国の本質は、1950年のユダヤ帰

還法に示されています(この法律は、ユダヤ人、ユダヤ教徒、ユダヤ人の配偶者などはイスラエルに帰還すると市民権を取得できるというもの)。

帰還法によれば、イスラエルは本人の意思と関係なく世界中のユダヤ人の国なのです。国民国家でありながら国民でない人々を国民として無制限に認定し、世界中のユダヤ系の人々を精神的に呪縛する存在でもあります。もちろん帰還法に反対し、無視する人々も大勢います。イスラエルの存在はユダヤ系の人々が生活している国家に忠誠を誓うのか、イスラエルに忠誠を誓うのか?と、2つの国の利害が違った場合のいわれのない疑いなど、様々な問題を生じさせます。冷戦時代、ユダヤ系ソ連国民でありながらイスラエル諜報機関に協力したか否かなど、たびたび問題が起こっていました。

その一方で、イスラエルは非ユダヤ人の人口増加を拒んできました。イスラエルは、追放した先住パレスチナ人が、イスラエルとなってしまった故郷パレスチナに帰る権利(1948年国連決議19

4号)を徹底して拒否しています。また、イスラエル国内の人口の約20%を占める非ユダヤ人であるパレスチナ人(イスラエルアラブ人と呼ばれる)はユダヤ国家原理の外縁の位置に置かれ、パレスチナ人差別が日常的に行われています。

ネタニヤフ政権が2018年にイスラエルの国会で採択した(賛成62反対55)ユダヤ国民国家法は、この原理を露骨に法制化しました。そこでは、第1にイスラエルで民族自決権を持つのはユダヤ人だけであると明記し、第2にこれまで公用語だったアラビア語を外し、ヘブライ語のみを公用語とし、第3に国家として入植地拡大、入植推進奨励を明記しました。この法は、1948年の建国時のイスラエル独立宣言にも反しています。実際のイスラエルは多民族国家でありながら、居住するパレスチナ人に平等な人権がなく、西欧が言うような「イスラエルは中東唯一の民主主義国家」というのはまやかしです。このユダヤ国民国家法の発効はイスラエルがアバルトヘイトの国であることを暴露しています。しかし米

欧諸国は「イスラエルの内政問題」として、この差別法を問題にしません。

校正作業に頭を悩ませながら

ガザの状況がどんどん悪化していく中、『パレスチナ解放闘争史』の校正作業にまだ追われていました。原稿と資料などを読み比べる日々が続きました。

パレスチナの歴史の経緯を知ってほしいと急ぎながらやっと校了にたどり着き、3月には作品社から発刊されます。獄中で本を出版していた時にはプロの編集者だった大学時代の先輩に頼っていて校正は任せてきました。出所後に出版した『私たちの時代』は、自分の身の周りのことです。校正も難しくありません。でもパレスチナの歴史となると、正確さを問われます。

校正、事件の日付が違ってないか再度確かめたり、参考にした本によって、事実が違うのを再考したり慎重さが問われました。特にアラブの地名、人名は発音によって新聞や資料などで違う上に、私が獄中で書いた当時、発音をカタカナ

で適当に書いたので呼称が不統一で、それを統一する作業もかなり時間がかかりました。『パレスチナ解放闘争史』は研究書の厳密な分析や客観性と違って主體的、主観的な見解ですが、それでも事実関係は正確でありたいので、校正が多々ありました。約1000枚あった原本記述から半分に圧縮する際に大事なことが抜けていたり、一度も出てこないのに前述したような書き方になっているのを再校になってから気づき、数行省いてそこに押し込んだりと、実務的な手間がかかっ

たかったのですが、パレスチナに焦点を当てているので省略しました。また草稿を書いた7年前からの変化からもう一度オスロ合意をとらえ返してみたのですが、時間の制約もあって加筆できないところもありました。

また校正をしながら書ききれなかったこと、もつと踏み込みたかったことがいくつもありません。一つは上にも書いたのですが、シオニズムという国民国家を超えたイスラエルが民主主義国家として成立するためにどう自己解体・再構成が可能なのか、シユロモ・サンド著の『ユダヤ人の起源』から学習したイスラエル国家の歴史的仕組みや、ユダヤ人のうちのエリート、アシユケナジムはハザール人であるというアーサー・ケストラーの実証などを書き込み

校正しているときに実感したのですが、イスラエルのジェノサイドの今の現実、英帝国主義のパレスチナに対する植民地支配の継承であり、それは、先住民を圧殺してきたアメリカやオーストラリアという国の成り立ちと通底しているということです。また日本帝国主義のアジアに対する植民地支配と全く共通したあり方だと思ひました。人間を人間と思わない植民地支配は、これほど過酷なことまでできるものなのか……と実感します。先住民は野蛮で劣等種という差別蔑視を通して何をしても構わないという植民地支配の在り方が、今もイスラエルのジェノサイドとして繰り返されているのです。

伊達判決を生かすために

1月15日は明大の先輩、土屋源太郎さ

んらが提訴してきた砂川事件の国家賠償訴訟の判決日。満席の傍聴人でした。原告は国を訴えたのですが、国というよりまさに、裁判所の憲法違反を憲法に照らして問うた裁判だったのです。しかし訴えは棄却されてしまいました。

1959年3月、伊達裁判長は、「日米安保条約と米軍駐留は、日本国憲法9条2項違反であり被告人らは無罪」と判決を下しました。この判決で、砂川基地拡張反対闘争を闘った土屋さんらが無罪となったのがことの始まりです。日米支配層はどんなに仰天したでしょう。翌日にマッカーサー駐日アメリカ大使は日本の藤山外相に高等裁判所を飛び越えて最高裁に上告しろと勧めたり、最高裁の田中長官がこの事件を優先的に扱おうと大使に答えたり、憲法上の争点を判断を下したのは誤りだ、などと発言する密談をしていたのです。翌60年の安保改定を控えており、この判決を覆す方途を謀議して「統治行為論」なる詭弁を編み出して差し戻し有罪に持ち込みました。ところが2008年に、日本の研究者らによって

米公文書館からこの密談資料が発見されたのです。密談謀議があったと知った土屋さんから元被告らが再審を求めましたが却下されたため、国賠訴訟で伊達判決の有効性と裁判の公平性を問うたのです。それが、今回却下されたのです。

満席の法廷では、3分あまりの写真撮影のあと、「それでは開廷します。正文1、原告らの請求をいずれも棄却する。2、訴訟費用は原告らの負担する」と10秒足らずの判決を読み上げて閉廷しました。「写真撮影より短いなんて!」「ナンセンス!」「ひどい!」。傍聴人たちは口々に嘆きました。

閉廷後、裁判所からやっと判決文を受け取り、その1冊しかない原本の36枚の判決文を、弁護士も十分に読む時間もなく、地方裁判所地下のコンビニに行つて大慌てで大量にコピーしました。すぐ始まる記者会見に間に合わせるためです。判決文は、裁判所の苦しい言い訳で、子ども騙しのような文です。

米大使と田中裁判長の会見はあつたと認めた上で「裁判官が事件に予断や偏見

をもたらず関係を、事件関係者と有すな

どの特段の事情があれば公平な裁判とは言えないが公文書に書かれている「一番の判決が覆されるだろう」という発言は長官の発言か不明」(重信注・他に誰がいるのか?)。だとし、田中長官の発言からは「特段の事情があるとは言えない」「推認できない」などと弁明を判決文で繰り返しています。そして、「具体的な評議内容、予想させる判決内容まで伝えた事実を認められず、公平な裁判でないとは言えない」という苦しい言い訳の上、被告らの請求を棄却するというものです。記者会見ではこの点を強く主張し、土屋さんは「誰が考えてもこんな不公平な裁判はない。司法の正しい在り方を求めるためにも闘っていく」と控訴を表明しました。記者会見の後、衆議院議員会館で集会が持たれました。傍聴に参加したほぼ全員が集まり、土屋さんを始め、弁護士やいろいろな方が判決への怒り、判決の不当性を語りました。控訴に向けてさらに判決文の矛盾を追及しながら運動を広げ、一人でも多くの市民に「伊達判

決」の意義を伝えていこうと、みな意気盛んに語り合いました。

この伊達判決が重要なのは、日米首脳の間密談もさることながら、これを覆す詭弁「統治行為論」がこの時発明され、今もこの論理が日本国憲法を骨抜きにし、日米安保条約を憲法の上に鎮座させていることです。控訴審は司法の公平性を問うとともに、この統治行為論の廃止を求めていく一歩にしていきたいものです。

ラファアのジェノサイドを止めねば!

ラファ攻撃の始まる中、2月15日の外務省前集会は厳粛な空気が支配していました。外務省の前の歩道にダイ・インで横たわる何十人もの姿。ガザの遺体の列のように……。ダイ・インが始まると沈黙が包みましました。それまで呼びかけやアピールで騒然としていたので、その静寂は一人一人にガザで殺されていく人々を思い起こさせます。

もともと30万人が住むラファの町は、100万人以上の避難の住民で膨れ上がり悲惨な状態とのことです。UNRWA

施設だけでも2万8000人が押し寄せ、トイレが500人に1つ、シャワーが2500人に1つ、食料は必要量の半分以下だとUNRWAの清田保健局長が話しています。こんなジェノサイドになることを分かっているが「自衛権」などとイスラエルまで行ってネタニヤフを鼓舞してきた米欧政府の戦争犯罪加担の責任は免れないと私は思います。それでも米国内の若者たちの方を超す集会やデモが、今年選挙をむかえるバイデンの姿勢を少し修正させています。

18日は、在日パレスチナ人の呼びかけのスタンディングデモが新宿駅南口で夕方5時から行われました。2500人を超えたでしょう。ラファの爆撃が始まったと叫ばれる危機の中、緊張し、みな断固としています。主催者の在日パレスチナ人はばかりか日本側の主催者、発言者、通訳、集まった人々のほとんどが若者だったことはとてもうれしい光景です。年寄りの私たちはパレスチナ国旗やポスターを掲げて若者たちのコールに合わせて行動しました。1時間を超えると、立つ

て大声を出すことはこんなに疲れるものだ、と実感するのも生きているゆえでしょう。若いパレスチナ人がわかりやすく語り、実効性のある連帯を求めています。伊藤忠商事子会社のイスラエルとの取引をやめさせた成果を語り、BDS運動の継続を求め、「フリーフリーフリーガザ」と呼び呼びかけました。「ポリーシフト」の時代と言われるように、今年は南アフリカをはじめとする公正をもとめる声のパレスチナ問題を通してもっと動きそうです。グローバルサウスと呼ばれる新興国が国際秩序の二重基準を批判し、公正を求めると時代。国際社会の極は北が定めた秩序から変更を求める南へ極が揺れ動いているという意味でポリーシフトの時代というそうです。ジェノサイドに立ち向かい正面から批判するのは、今のところ南アフリカやブラジルのリーダーたちです。強制移住が迫るラファの危機を何としても声をあげて阻止したいと思います。

元日の隣壁がガザに重なりぬ
朝市通りのなみふる傷跡 (2月18日)

例、5冊

ただいま

SHIGENOBU FUSAKO'S

りハピリ中

第18回

重信房子



国際女性の目線

アラブ圏では3月10日、聖なるラマダン(断食月)が始まりました。でもイスラエルのジェノサイドは続いたままです。3月8日の女性の日、ライラたちパレスチナの女友だちにメッセージを送りました。「親愛なる友よ、この女性の日に心からの連帯の挨拶を送ります。イスラエルは、建国前から狙っていたパレスチナ全土の完全なユダヤ化に向けて剣き出しの一步を踏み出しています。私たちが今住んでいる世界は米国を含む指導者たち

がイスラエルのジェノサイドを支援し続けるという、かつてネルソン・マンデラ達が築いた貴重な遺産とは対極の世界です。人間の尊厳をかけてパレスチナ人先頭に戦う歴史の重要な局面に生きていると実感します。私は日本の市民の一人として東京からささやかにパレスチナに連帯しています。3月30日のパレスチナの土地の日には、在日パレスチナ人と日本人を含む若者たちが『新宿駅ラッピングデモ』sを計画しています。新宿駅を

包むように参加者がスタンディングするデモンストレーションです。私はまた日本人の人々に知ってもらうために『パレスチナ解放闘争史』を丁度3月出版しました。希望はあきらめない限り、達成できると私たちに教えてくれたのはあなた達です。パレスチナの人々と一緒に暮らし戦ってきた日々は、今も私の誇りです。私はパスポート発給が拒否されるためにそちらに飛んで行くことはできませんが、私の心はいつもパレスチナの友と共にあります。いのちに気をつけてください。国際女性デーに」と。この日、図書館へ向かう道にふきのとうを見つけました。必ず春が来る！ そう自分に言い聞かせながらふきのとうを一つ摘みました。

国際司法裁判所の判決

1月26日、ジェノサイドを防ぐあらゆる措置を行うようイスラエルに命じた国際司法裁判所(ICC)の判決は世界に良い影響を作り出しています。イスラエルが判決を無視したとしても、世界の国々を変える、変えざるを得ないという意味

「この判決は重要です。ICCの判決が国連加盟国に拘束力を持つという事実は重いからです。日本では国際ニュースはたちまち目先のニュースに置き換えられて遠景になってしまっていますが、ICCの行動は、ガザでのイスラエル軍の虐殺の激化や人為的飢餓への対策など国際社会で継続的に焦点化されています。アルジェリアはイスラエルのラファへの地上作戦を止めさせ、即時停戦と人道支援の強化などを求めICCの命令を強制力ある安保理決議とするため決議案を提出しました。2月21日、安保理15カ国中、日本、仏を含む13カ国が賛成したのですが米国が拒否権を行使して葬りました。昨年10月以来、4度目の米国の拒否権です。ここにイスラエルのジェノサイドを止められない国際社会の核心があります。飢餓を支配の道具としているイスラエルによって、ガザの危機はさらに深刻化し、飢餓による死者が報告され始めました。3月8日にはイスラエルの教育者であるラビ、エリヤフ・マリは、ガザ地区で幼児、子供、女性、高齢者を含むすべてのパレ

スチナ人を殺害し絶滅させるよう生徒たちに呼びかけたそうです。イスラエル社会の軌道を逸した様が目に浮かびます。こうしたイスラエルに制裁を科して飢餓を止めるべき大国が拒否権を行使してジェノサイド行為を防衛し、その一方で空から食料を投下するという本末転倒が始まりました。コストもリスクも悪循環に陥っています。こんなやり方ではイスラエルの虐殺を止められずガザの人々を救うことができないばかりか、人道支援の名で人権を踏みにじつているのです。2月22日国連安保理に呼ばれた国境なき医師団の事務局長は「今日のガザにおける人道的対応は幻想に過ぎません。この紛争が国際法に則って行われているという物語を長続きさせる都合のいい幻想なのです。人道支援を求める声は、この議場に響き渡っています。しかしガザでは、場所も、薬も、食料も、水も、安全も、日に日になくなっています。我々にははや、人道支援の拡大を話題にはしていません。必要最低限のものがなくてもいかに生き延びるかが現在の課題となって

いるのです」と米国を始めとする国々の在り方に怒りをぶちまけています。イスラエル制裁を回避したこんなやり方は早く清算されるべきです。

でもICCに別の動きも生まれています。3月1日、ニカラグアがドイツを提訴しました。イスラエル軍によるガザへの攻撃に加担することは、ジェノサイド条約やジュネーブ諸条約に違反しているとしてニカラグアはドイツについて「イスラエルを政治的、財政的、軍事的に支援する一方、UNRWA(国連パレスチナ難民救済事業機関)への資金提供を停止した」ジェノサイドの実行を助長するとともに、その防止のためにあらゆる措置を講じる義務を怠った」と訴えたのです。そしてニカラグアはICCに対して、ドイツがイスラエル支援を即座に停止し、UNRWAへの資金拠出停止を撤回するなどの暫定措置命令を出すよう求めました。イスラエルのジェノサイドに対するドイツの異常な加担はその通りですが、米国の拒否権行使でジェノサイドが続いている実態を阻止するために米国をICC

Jに提訴するべきではないかと思えます。日本もジェノサイドに加担している

ICJの暫定命令をイスラエルが無視してもその同盟国、特に米国は命令を無視した場合共犯とみなされるのです。日本も安倍政権がイスラエルとの「準戦略同盟」を深め、軍事情報・技術交換、イスラエル軍と自衛隊の交流、イスラエルとの投資協定と関係を拡大し続けました。ガザのジェノサイドの最中の1月に防衛省がイスラエル製の攻撃型ドローン(無人機)の導入候補を選定した事実は法的にも許されない行為であり、露骨なイスラエル支援です。武器取引に反対する市民の努力で3月4日にはイスラエル製の5機の輸入代理店も判明しています。なんと5機種のうち小型機のIAI製の2機は、1円の落札価格だったとのこと。エルビット・システムズとの「戦略的協力覚書」を2月末で終了させたはずの日本エヤークラフトサプライが、エルビットの輸入代理店になっており、住商エアロシステム、川崎重工業なども輸入

代理店契約をしているとのこと。山梨に本社を持つ世界第2の産業ロボット製造企業ファナックも、イスラエル軍にガザ市民殺害の戦闘ドローンを供給しているエルビット・システムズとIAIなどのイスラエル軍需産業に製品、技術を提供しています。ファナックのロボットによってイスラエルの殺人兵器が日々作られている以上、ジェノサイド犯罪に日本の企業もまた加担しているのです。法的拘束力を持つICJの判決をイスラエルのように日本は無視するのでしょうか。私は不勉強ながら、南アフリカのICJ提訴によって日本がジェノサイド条約に加盟していないことを知りました。とくに加盟していると思っていました。日本が未加盟の理由はジェノサイド条約で罪になる「扇動」は国内法では罪にならないなど国内法との調整の必要が言われていますが、ジェノサイド条約第6条では国際刑事裁判所や違反行為が実行された国だけでなく、締約国の国内裁判所などにも処罰の権利や義務がある旨規定されており、条約以前の歴史上のジェノサ

イドを疑われる行為、旧日本軍による中国の南京虐殺事件の懸念から加盟をしないことが大きいように思いました。UNRWAの叫び

UNRWAの叫び

イスラエルは、ICJの判決と同時に、情報戦を開始しました。UNRWAの狙い撃ちです。10・7洪水作戦にUNRWA職員が関与したと主張しはじめました。待っていたように証拠も無しにすぐさま米欧、さらに日本もUNRWAへの拠出金の支払いを停止しました。

これまでイスラエルはUNRWAの13人の職員が10月7日のテロ攻撃に関与したと主張していたのが3月4日には「UNRWA職員の450人以上がガザのテログループの軍事工作員である」と糾弾中です。

UNRWA当局は、イスラエルが数人の職員を拘束し、拷問や虐待によって、虚偽の自白を強要したことを非難しているとアルジャジーラは伝えています。「このような拷問による自白の強要は、イスラエル当局によってUNRWAを解

体しようとする試みの一環として、UNRWAに対する誤った情報をさらに広めるために利用されている。これはガザにいる私たちのスタッフを危険にさらしており、私たちの活動に深刻な影響を及ぼしている」と悲痛な抗議をしています。イスラエルのキャンペーンにのった米日欧などが、UNRWAの年間予算のほぼ半分にあたる約4億5000万ドル相当の資金提供を停止したままだそうです。

イスラエルが1948年の国連決議194号「パレスチナ難民の帰還の権利」を拒否し難民問題の消滅を狙ってきた歴史がいま再び焦点となっています。当時の国際社会は、第2次大戦後の混乱で、多くの難民の救済が問われていました。

そのため、国際難民機関(International Refugee Organization=IRO)が、1946年4月20日に設立されました。1947年の国連分割決議以降、イスラエルのパレスチナ民族浄化、第1次中東戦争によって多くのパレスチナ人が祖国を追放されました。国連総会は1948年パレスチナ人が故郷に帰る権利を認めました。

しかしイスラエルは、パレスチナ人の帰還を拒否し、休戦協定ラインを越えて自分の故郷へ戻ろうとするパレスチナ人を射殺したりしました。パレスチナ人は、故郷に戻る事ができません。国連は1948年にパレスチナ難民事務部(UNRPR)を設置しました。この時シオニストは、IROは「政治的だ」としてパレスチナ難民がIROに組織されることを妨害しました。IROは、「難民の帰還」を原則にしていたためです。IROは1951年に活動を終了し、国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)に再編。その後、米国の後押しを受けて、「非政治的」人道組織としてUNRPRはUNRWAに再編されました。

このUNRWA設立に対して、アラブ諸国は大反対しました。UNRWA設置はパレスチナ人が故郷に帰る道を奪う陰謀だ、パレスチナ人が難民として永続的にこの機関の下に置かれ、難民問題を長期化させる機関となる、と警戒したので。エジプトのナセル大統領を中心にアラブ連盟は、イスラエルがパレスチナ人

の帰還の権利を拒否し、アラブ諸国へ同化させ難民問題を終わらせようとする策動と闘っていたからです。1965年アラブ連盟はカサブランカ協定を採択しました。パレスチナ人の帰還の権利を護るためアラブ諸国は市民権や国籍を難民に与えないという協定です。この協定が、いまもエジプトがガザの住民を受け入れない大きな根拠となっています。エジプトへガザ住民を避難させればイスラエルがああなクバの時のようにガザを占領し住民は戻れなくなり、エジプトへの同化やシナイ半島でのパレスチナ都市造りをイスラエルが狙っているからです。

イスラエルは、昔はパレスチナ人の帰還を拒否するためにUNRWAを利用し、今となってはそれを潰すことに熱心になっっているわけです。CNNは1月31日、「ネタニヤフ氏は国連大使らに対して、『国際社会と国連自身がUNRWAの任務を終わらせなければならぬことを理解すべき時だと思ふ』と述べた」と伝えています。ネタニヤフは、2月22日、初めて公式にガザ攻撃が終了した後の「計



3月16日、作品社から発売

画」を発表しました。再植民地化計画です。その内容の第1は、パレスチナ国家の「一方的承認」を拒否するとして、2国家案を認めない、第2にガザのハマス支配を終わらせ、西岸地区もガザ地区もイスラエル管理下に置く。第3に中期目標としてガザを非武装化しイスラエルが治安を維持しハマスに代わる支配に置き換えろというもので、そこでもUNRWAを解体し、他の国際援助団体に置き換えることを計画しています。

欧米ではUNRWAへの支払いをストップしたことに抗議する市民の声に押されてスウェーデン、カナダ、欧州委員会は資金援助を再開することを決定しました。日本でもNGOなどが資金提供再開を求めています。日本を含む先進国は3月20日現在停止したままです。パレスチナのガザも西岸地区もジェノサイドの続くラマダンの厳しい生存の闘いが続いています。

映画を観る

あまり映画を観ない私ですが、幾つもの

鋭い国家政策への批判をすごいなと思いつつ、バックグラウンドをもっと勉強してくればよかつたなと思いました。若い倉岡さんが2歳の子どもと共同構成担当のパートナー、そして撮影担当の友人と共に少人数で映画制作をしています。倉岡さんがインタビューで好奇心をぶつけていてそれがなかなかいいです。私に日本にいなかった時代を少し知りました。また3月中旬に代島治彦監督に招かれて『ゲバルトの杜』彼は早稲田で死んだ』の試写会に行きました。大変衝撃的な事件が今では老齢となった当事者の証言を中心に、丁寧に事実を検証して描かれています。抽象的な党派批判、内ゲバ批判ではなく、血の通った当時の人間たちのやむにやまれぬ様々な理由の闘

の映画を観る機会がありました。2月末には東村山の凸凹映画研究会の主催で『ガザ素顔の日常』という映画を上映し、その後私がパレスチナについて話す機会を頂き、ガザの映画を観ました。この研究会の素晴らしいところは地域の方々に見てもらいたい映画を無料で上映していることです。現在のガザを知るうえでとてもリアルにガザを想像することができるといい映画でした。イスラエルに封鎖されたガザ。さらに空爆に晒されながら、少年は漁師になる夢の歩をたくましく踏み出し、空爆下、他の仲間たちもそれぞれ仕事を探し、家族のいたわりあい支え合う日常が描かれています。パレスチナの人々は剣き出しの本音で付き合おうし、人間的で家族、親類、地域が助け合う姿が、私の知る昔と変わリません。こんな苦しみの中でも陽気に描かれる場面も多く救われます。ガザのジェノサイドのせいで普段より多くの人々が映画会に見え、50人の座席が足りず、20人近くがマットを敷いて床に座って参加しました。私も熱気で汗をかきながらガザの話から、

いの切迫感を浮かび上がらせていてとても心に響きました。最後の方で当時革マル派として川口君を死なせた学生の一、佐竹さんという人の「転向謝罪文」が掲載されていてその中で「いのちの尊厳無しに人間を解放することは出来ない」と痛苦の反省の言葉が記されていて胸を衝かれました。これは「転向」ではなく「良心の告白」です。「べき論」に拘泥し、こうしたまともな神経をのびのびと育て得なかつたところに私たちの時代の闘い方の欠陥がありました。

全く違う状況下ですけど、「革命家である前にヒューマニストであること」と肝に銘じていたパレスチナの戦士たちと共に闘っていた時代と重なりました。

米欧、シオニスト、イスラエルの巨大な敵に物理的にはちいさなゲリラ勢力が勝つためには政治的対峙を創り出す必要がありました。戦士がヒューマニストであるということは軍事暴力の限界や否定面を知り、それでも武器を取らざるを得ない現実を引き受けることでもありました。解放と革命は差別抑圧の苦しみと怒り

歴史の話へと参加者のみなさんに語り続けました。1時間半くらい過ぎたところで質問に移り、有意義に語り合いながら時間を惜しんで別れました。主催者の人柄のせいか近しい友人たちが集まり、嬉しい一日となりました。

3月には私の公判が行われていた時、フランス語翻訳などで助けて下さった倉岡明子さんが制作/構成を担当されたドキュメンタリー映画『六ヶ所人間記』が上映されるといのでお礼を兼ねて挨拶がたが友人と伺いました。京橋にある国立映画アーカイブで『日本の女性映画人(2) 1970-1980年代』の上映が行われていました。倉岡さんの作品『六ヶ所人間記』は、3時間ほどの長編で、1982年から3年間にわたる六ヶ所村の人々の日常や村の行事などが描かれています。特に1984年に核燃料サイクル施設設置の話が持ち上がり、反対する人々の生活に根差した疑問や論理を追い、一人ひとりが丁寧に描かれているのが印象的です。当時の反対する人々の率直な声、姿勢、またそういう人々の本質的で

の中から人としての尊厳を求めて闘っており、希望を開くものでなければ勝利し得ないと、パレスチナで戦いつつ学んだことを想いつつ映画を観ていました。「どんなことがあっても生きろ」というパレスチナの声と同じように、この映画の中にも監督はその思いを込めているように思います。3月30日はパレスチナ土地の日です。1976年のこの日、土地の強奪に反対しイスラエル内のパレスチナ人が初めてゼネストをもって抗議し、イスラエル軍の弾圧で6人が殺され100人以上が負傷して以来、毎年この日を記念しています。世界各地も連帯して行動します。

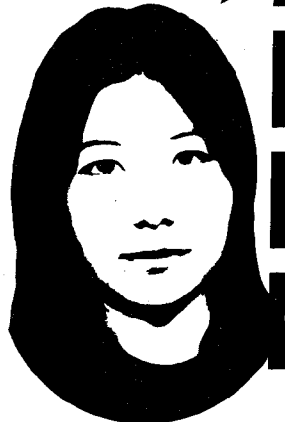
3月16日、やっと『パレスチナ解放闘争史』(作品社刊3600円+消費税)が発刊されて店頭に並びました。100年以上の歴史なのでどうしても厚くなり字も小さいですが、パレスチナの歴史と現実を知るためにぜひ手に取ってほしいです。近くの図書館にリクエストしていただくなど、出来るだけ多くの人に読んでほしいと思っています。(3月20日)

ただいま

SHIGENOBU FUSAKO'S

第19回

重信房子



断食月に

断食月

断食月の祝祭叶わぬガザの民 地に伏し祈る背 月光に濡れる。

こんな歌が零れました。

ラマダン中の3月23日、アントニオ・グテレス国連事務総長は、エジプトとガザの国境の町ラファを訪れ、ガザ地区での即時停戦を改めて訴えました。

国境で彼は「この聖なるラマダンの月に、イフタールをきちんと食べられない人々がいることを知り、深く心を痛めている」と述べました。イフタールとは、

ムスリムが1日の断食を終えた日没直後の最初の食事のことです。まず水を少し飲み、ナツメヤシなどをつまみ、断食の苦痛を和らげ、忍耐を誇り神に感謝の祈りを捧げ、普段より豪華な夕食をとりまです。家族、親しい人、隣人と分かち合う宴のような夕食がラマダン中続き、楽しく豊かな時間を過ごします。ガザの人々はこれまでの日常の当たり前の生活を奪われて飢餓に苦しんでいます。グテレス事務総長はガザの人々が飢餓に直面し

ている一方で、エジプト側の国境に数千台(約7000台)もの援助トラックが停止させられアクセスを待っている光景は「道徳的な暴挙だ」と述べました。国連事務総長は「10月7日の行動を正当化するものは何もないが、パレスチナの人々への集団罰を正当化するものは何もない。苦難にまみれ、家が壊され家族や世代が全滅し飢餓が人々を襲っている。今こそ銃を下ろす時だ。停戦が必要なのです。私はあきらめない。人類のために、あきらめてはならない」と訴えました。

そうした国連やNGOの努力に報復するようにイスラエル軍は国際NGOの車列を空爆で威嚇し、4月2日、とうとう海外からの援助に奔走していたNGOスタッフ6人も殺害してしまつたのです。イスラエルは誤爆だと弁解しました。しかし、報道機関やいくつものNGOがターゲットとされている現実を世界に示し、イスラエルの引き続き暴挙を国際社会は非難しています。

その上ネタニヤフ政権は事実を報道する、うるさい報道機関を締め出すことを

決めました。イスラエル国会は4月1日、「国家の安全に害を及ぼす」と認定された外国報道機関の活動を規制する法案を賛成多数で可決したのです。

特にこの法律はアルジャジーラを念頭に置き、カルイ通信相はX(旧ツイッター)で、「ハマースの代弁者に言論の自由はなくなる」と述べています。問題があると判断された報道機関は、イスラエル国内の事務所の間鎖、機材の没収、ウェブサイトを見られなくする措置などを命令できるという法律です。

ネタニヤフ政権はまた、ジェノサイド批判が高まる中、局面を変えるべく、イランや、シリア、レバノンターゲットにした戦争を仕掛けています。「イランがイスラエルを攻撃」と盛んに報道していますが、中東から見る世界は違います。いつも先に挑発し、それによつて目的の方向に状況を誘導するのは、イスラエルです。レバノンとの戦争状態も、イスラエルによるレバノン在住の神の党やハマースのリーダーたちの暗殺、施設の破壊や村へのイスラエルの攻撃から始まりま

した。イスラエルはガザへのジェノサイドのおぞましい光景を「テロとの闘い」と一般化させ、かつての米ブッシュ政権によるイラク侵略のようにイランへの戦争を米軍にやらせたいのです。国際法を無視してシリアのダマスカスにあるイラン大使館領事部を空爆し、イラン政府の幹部を殺害したのはイスラエルです。イランは、これまで戦争に巻き込またいイスラエルの思惑に乗らず自制してきましたが、今回は4月13日に報復しました。ところがイラン大使館を空爆したイスラエルを非難するよりも、イスラエルを攻撃したイランを許さないと騒ぎ立てる米イスラエル報道が日本を席捲しています。イスラエルのイラン攻撃は、第1にイスラエル建国の正当性を認めないイラン政府を米軍を利用して転覆させること、第2に「反テロ」戦争というくりに国際世論を誘導しながらガザからイランまで中東に戦乱を拡大させ、乗じてガザと西岸地区のパレスチナ人を民族浄化し続ける狙いがあります。

「パレスチナ土地の日」連帯行動

3月30日はパレスチナ土地の日です。イスラエル領内でナクバ(1947年12月からの大厄災)を生き延び、イスラエルの弾圧差別に耐えてきたパレスチナ人たちが、1976年3月30日、初めてゼネストをもつて組織的に立ち上がりました。イスラエル政府による国防法から始まつて未耕地利用緊急法、不在地主財産収用法、非常時土地収用法など様々な土地収用法の名でパレスチナ人は理不尽に土地を強奪され続けたからです。それに対してイスラエルは銃弾で応じ6人が殺され、何十人もが重傷を負いました。このニュースにイスラエル内パレスチナ同胞のために、被占領下のパレスチナ人たち、ヨルダン、シリア、レバノンで難民の暮らしを強いられてきたパレスチナ人たちが立ち上がり、イスラエルに抗議し、同胞に連帯しました。この日を歴史に刻もうと、以来3月30日は「パレスチナ土地の日」としてパレスチナばかりかアラブ人、パレスチナに連帯する世界各地の人々の連



新宿でのラッピングデモ

帯行動の日として続いてきました。パレスチナのジェノサイドが続く今年、北海道から九州まで、日本の各地で土地の日の連帯の催しが行われました。東京では連帯とイスラエルジェノサイドへの抗議を「新宿ラッピングデモ」を通して訴えました。

広い新宿駅全体をスタンディングの人々で円周に囲む(ラップリ包む)のです。ビューマンチェーンのようにですが通行人の邪魔にならないように手をつなぐ、ポスターや旗などを両手に抱えて立ちます。そして駅出入口をポイントとして各団体がコールやスピーチを行います。

ガザの悲惨なジェノサイドの現実を直視しつつ、若い参加者が多いためか明るい連帯のアップロードです。南口には在日パレスチナ人やBDS運動(イスラエル占領地で生産される製品はボイコット、占領地企業に投資しない、制裁を求めるという国際連帯運動)の若者たちを中心に、東口には「パレスチナに平和を！緊急行動」を中心とする市民団体など、各駅口に多くの団体が賑やかに集まりました。

「ガザ！」とコールしてました。その時の様子でこの男たちは妨害者だと分かった。あとでこの土地の日の新宿ラッピングデモを妨害したのはイスラエルの柔道選手団だと知りました。主催者側が、安全員を配置し、弁護団を準備してこういう事態に備えていたので、日本人とパレスチナ人たちが妨害者たちの動きを封じながら新宿ラッピングデモと集会を成功裡に終わらせました。

ところがイスラエル人はSNSなどで、柔道着を盗まれたとか、襲われた被害者であるかのように発信しているらしいです。はじめから彼らが「ハマース支持デモだ」と暴言を吐いたり、唾を吐いたり

た。新宿駅を包むためには3000人を超える参加者が必要です。

午後2時から3時にラッピングのスタンディングを行い、3時半から南口で集約集会がありました。私も高校時代の旧友を誘って参加しました。

旧友は地方の市議会議員で、ガザの停戦決議を市議会に提案し、全会一致の「ガザ停戦決議」を採択させたばかりです。この土地の日の新宿ラッピングデモの最中に、旧友に駅頭でこの停戦決議の報告と意義をスピーチしてほしいと頼まれました。旧友は気軽にすぐ駆けつけてくれて爽やかに演説しました。ガザのジェノサイド、特に女性と子どもが死者の3分の2を超える事態がどうして許されるのか？ 反戦を誓ったわが国がイスラエルのジェノサイドに加担するような輸出人や武器・ドローンの購入を図ってはならない、と切々と訴えました。2時半過ぎに、「ラッピングが成功しました！すべての地点がつながりました！」と主催者が自転車で回りながら伝えてくれました。思わず歓声が上がりました。40

突然バッグから柔道着を取り出して着込んだりと一方的に挑発していたようです。

主催者側はこうした事態を憂慮しその妨害行為を批判し柔道連盟に公開文を送ったとのこと。選手らの行為・態度は、柔道の精神にもスポーツパーソンシップにも反していると考えます」と。

また国際司法裁判所や国連安保理でも停戦を要求されているにも関わらず、イスラエル政府がその国際ルール・法・規範を一切無視してガザ地区でジェノサイドを継続していることを指摘し、イスラエルの選手らが「国際社会からの批判を理解できずに、単にこれを自国への侮辱」とらえ、暴力的な姿勢で市民の抗議行動を妨害することは非常に残念です」と述べ、第1に関与した選手らの特定と、イスラエル選手団および関係者らへの事実確認・厳重注意を求め、第2にイスラエルがジェノサイド行為を止め、数々の国際人道法違反の政策を取り止めるまで、

同国チームとの交流試合・同国関係者との人事交流などを見合わせることを、第3にパレスチナに対する柔道を通じた国際

00人くらいの人々が新宿駅を包んでしまったのは痛快です。

こうした手作りの市民たちの行動から1人でも多くの人々にガザの、パレスチナの真実を知ってほしい。彼らパレスチナ人は決して「テロリスト」ではない。「テロリスト」という言葉はイスラエルの占領という歴史と現実を隠蔽する魔法の言葉です。

3時のスタンディングを終えてそれぞれがゆっくりブランクカード、旗、ポスターを胸に掲げながら南口の集約集会に向かいました。移動しはじめると、新宿駅東南口、南口に大きな人だかりができていました。私はちょうど一つの人大かりから男たちが興奮したような赤い顔で憤然と出てきたところに遭遇しました。ポストンバッグを下げた男たちが何か怒鳴り散らし、明らかにこのスタンディングの雰囲気と違う一団でした。日本人が中心になって男たちの背に「フリーフリー！ガザ！」とコールして送り出しています。離れた反対側の輪で在日パレスチナ人や日本の若者たちが「フリーフリーフリー

協力を加速することを求めたとのことでした。

新宿での「ラッピングデモ」という新しい試みは若い日本人たちと在日パレスチナ人の共同アイデアから実現しました。かつてのベトナム反戦の街頭行動と違うけれど、今にふさわしい街頭行動だな、と思いました。また、70年代80年代には、「パレスチナ連帯」というと、市民運動すら公安事件のように付きまとわれた時代を知る者として、明るく開かれた伸びびとした連帯運動に心が豊かになる想いです。

土地の日の新宿スタンディングを終えて、私は日比谷公園に向かいました。2002年のこの土地の日、日比谷公園のカモメの噴水のところでイスラエルの弾圧に抗議しパレスチナに連帯して自決した旧友檜森孝雄さんを友人たちと追悼するためです。もう22年も経っているのに30人近い友人たちが集まって檜森さんに焼香し対話しながらひとときを過ごしました。「あなたが自決したあの第2次インテイクアードの時よりも酷い、4万人

も殺される事態がガザ、西岸地区で起きています。でもパレスチナの人々は人間としての尊厳を求め、祖国への帰還を求めて生き続けています」と檜森さんに告げました。

花咲く季節に

3月に入ると近所のふきのとうが、ぐんぐんと背を伸ばし春が実感できる季節になりました。獄中暮らしが長かったので、道端には、はこべ、クローバー、ホトケノザなど幼い時に父と摘んだ草が可憐に咲いているのを見るとつんと鼻の奥が痛むほどなつかしさが込み上げます。まだ肌寒い春、旧友遠山美枝子さんの墓参りに出かけました。

その日は少し風のある晴天で高台にある墓地へ、大学時代の友人たちと遠山さんの当時のエピソードを語り合いながら歩きました。遠山さんの墓参りはまた、いつもは会うことのない旧友を同窓会のようにつないでいます。永田和尚は僧侶の服装を整え、私たちは百合の花やスターチス、金魚草などの花々で墓を飾り、遠

山さんもきつと食べたいだろうと和菓子をお供えにしました。

昔を思い出しながらみんなで静かに永田和尚の説教を聞き、順番に焼香をしました。「遠山さん、教訓を思い返しなから生きていますよ。私もリハビリしながら市井の一人として、少しずつ迷わずにあちこちへ行ったり、必要なときには人に聞いたりしながら、暮らしています」。そんな思いで彼女に挨拶をしました。帰りには、みんな健康で久しぶりに再会したことを喜び合い献杯しながら昼食をとりました。またこの日は日本赤軍時代の仲間、泉水博さんの法要もあり、上野のお寺に向かいました。こちらは救援連絡センターの山中さんをはじめ、泉水さんが岐阜の獄にいた間支えて下さった方々も上京されて、20人以上集まった法事です。ひとりずつ泉水さんとの縁を語り、自己紹介し合い、広間でしめやかに読経が行われる中、焼香しました。

また、4月にはとても良い機会と経験を得ました。「NPO現代女性文化研究所」から学習会の講師を頼まれました。

この団体を知りませんでしたので、紹介してくださった江刺昭子さんから資料をいただき、またネットで調べたところ、100歳で亡くなられた望月百合子さんという、若い時はアナキストでヨーロッパ留学生活をし、戦後は社会運動家として活躍されていた方の意思を継承する団体だと知りました。

女性性はもとより誰もが自由に活躍し、才能を発揮できる場の創造を目指して2001年にNPOとして正式に発足した団体です。私は日本の市民社会から半世紀以上離れていたために、こうした人々の地道な活動を全く知りませんでした。こうした方々と話す貴重な機会をいただき、集まりに参加できたのはとても光栄なことでした。

会場は、望月さんが住んでおられた一軒家で、1階はアットホームなサロンのように整理され、2階は記念館のように望月百合子さんと現代女性文化研究所の活動の記録が展示されていました。研究所代表を務めておられる岡田孝子さんが迎えてくださり、とても温かい雰囲気

ただいまリハビリ中

気の中で、2時間ほどパレスチナの現実などについて話しました。その後、皆さんの手作りのおいしい料理を振る舞っていただき、参加されていた方々と親しく話す機会があり、様々な本を出しておられることも知りました。岡田さんは「限りない自由を生きて」という望月百合子さんの本や『風に向かった女たち』というタイトルの本―家父長制的な時代の中で理想を求め曲げず実践し、私たちの時代を開いてくれた望月百合子、松田解子さんら先輩女性たちについて記録―を執筆しておられます。またメンバーで、『夢二研究会』の坂原富美代さんの『夢二を変えた女』笠井彦乃などの本を知ることができました。鎌田慧さんも聴きにきてくださり、ニコニコと参加されておられ、初めて挨拶しました。みんな温かく優しい人たちがばかりです。こうした団体と出合う機会があったこと、特に日本の先達女性たちの活動の歴史について無知な私にとってはとても勉強になり、教えられる1日となりました。

ちょうどこの日はまた夜に娘のメイが

帰国したために楽しい再会と重なりました。「お母さんに空港で迎えてもらう日が来るなんて考えられなかった」と感慨深く言ったメイの喜んだ顔を見て以来、メイが帰国したり出発する時には、できるだけ同伴するようにしています。今回はちょうどメイが2001年に初めて日本に帰国した日と偶然重なりました。あれからもう23年です。私の友人や家族に支えられながらも、住んだことのない日本文化の中で、獄中の私を支え、日本で就職し生きてきた歳月を振り返ると、どんなにつらく嫌な思いもあっただろうと考え、私にできることはしたいと思えます。彼女はしつかり生きており、たかだか空港に迎えに行くことくらいしかできない私ですが。

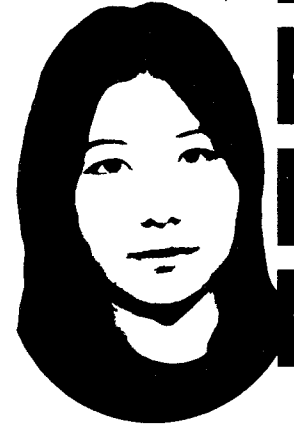
去年は獄を出て何十年ぶりにお花見の機会があったのに、お互い忙しく十分な花見ができなかったので、今年は花見をしようねと言いながら一緒に夜の街を帰りました。その後やっぱりメイは仕事で忙しく、温泉に行こうなどと話しているうちに、もう桜も散り始めメイもまた出

張する時期になってしまいました。それでも私が生まれた馬事公苑の近くに行きました。散りつつある桜の花びらが時々風に舞い上がる中を2人で歩く機会があったのはとても嬉しいことでした。花咲く季節は良いことがある、ガザはあのような苦しみと悲惨なジェノサイドの中にあるけれども、命を大切にしようことの意味を再び2人で語り合いました。リハビリをしながら私も日本社会にも慣れ、4月は大学時代の友人の仲介でロータリークラブでパレスチナ問題のテーブルスピーチする機会もありました。人生を楽しんで語っています。

『パレスチナ解放闘争史』が3月19日に発売されましたが、4月9日に重版が決まったと作品社から連絡をいただきました。また4月13日の朝日新聞の書評欄にこの本の書評が載りました。何人かの友人が「良い書評が載っているよ」と教えてくれました。重版に向けて校正しているところです。とてもうれしいです。パレスチナの歴史と現実を知ってほしいと願っています。 4月15日

ただいま SHIGENOBU FUSAKO'S リハビリ中

重信房子



第20回

イスラエルのジェノサイド

益々暴走するネタニヤフ政権

「最も単純な真実は、ラファでの地上作戦は、言葉を超えた悲劇に他ならないということ。いかなる人道的計画もそれに對抗できない」。国連のマーティン・グリフィス人道問題担当は4月30日語りました。「ラファの為に何週間もイスラエル当局に訴えてきたが地上作戦はすぐそばにある。病気、飢饉、集団墓地、戦闘から逃れてきた何十万もの人々にとつ

て、地上の侵略はさらに多くのトラウマと死をもたらすだろう。：私たちは飢饉と死を食い止めるために競争をしているが負けています」と悲痛な声明を発しました。停戦の成立を望まないネタニヤフ政権は、ハマースが停戦案に合意した途端にラファの空爆と砲撃による破壊を始め、米国のレッドラインを意識しつつラファ地上戦を開始しました。

ネタニヤフ政権は国際世論を拒否し、ジェノサイドを繰り返すことでかろうじて政権を維持しているのが実情です。4月30日のガーディアン紙は、「ネタニヤフ政権の閣僚たちは、停戦提案を進めるかどうかについて公然と論争を繰り広げており、彼の連立政権の極右議員は、イスラエルがハマースの要求に『降伏』すると見られれば政府を辞めると脅し、中道派は、人質取引が成立しなければ辞任すると述べている」とのことです。

4月18日

しかもネタニヤフ政権はこの安保理決議案でパレスチナ国の国連加盟に賛成した日本、フランス、韓国などの国々に抗議して大使を召還したと発表しました。

安保理で否決された後、国連総会では再びパレスチナ国加盟の審議を要求する決議案を採択し対抗しました。日本を含む143カ国が賛成して可決しました。が、総会決議は拘束力がありません。

ガザでは4000人を超える集団墓地が暴かれ、縛られたままの拷問された生々しい遺体がジャーナリストたちの努力で世界に伝えられています。

米国の65を超える大学で学生がイスラエルのジェノサイドに抗議し、ネタニヤフを支援するバイデン政権を批判し、自らの大学のイスラエルとの関係停止を訴えています。ガザから届く映像と言葉の事実が真実への道を開いたためです。パレスチナに連帯する大学のテント村から支援が広がり全米を席巻し、欧州、日本にも届いています。バイデン政権やシオニストたちはこうした若者たちに危機感をもって取り締まりを始めました。既に

米国の2000人を超える学生が逮捕される有様です。5月2日、「反ユダヤ主義(antisemitism)啓発法案」が米下院を通過しました。「反ユダヤ主義」は、古くからユダヤ人に対する偏見や敵意を正す意図で使われてきた言葉でしたが、最近はこの言葉の定義が拡大され、イスラエル政府に対する批判も反ユダヤ主義と同一視される傾向です。

米国全土の大学で繰り返されているパレスチナ連帯運動は、イスラエル政府に対する強い批判であり、この法案成立によって取り締まりが強化されるとのこと。ネタニヤフ政権によるパレスチナ人の虐殺をナチスによる虐殺に例えると、逮捕されるだろうとのコメントもありました。ネタニヤフ政権は子どもを中心に4万人を超えるパレスチナ人を殺害し、両親を殺された孤児は1万5000人以上に上り、日々最悪を更新し続けているのがガザの実情です。

パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)が3月にまとめたイスラエルの刑務所における広範な虐待を記した国連の

内部報告書があります。報告書によると虐待の方法には、「肉体的な殴打、長時間のストレス体位の強要、被拘禁者とその家族への危害の脅迫、犬による攻撃、動物のように振る舞わされたり、小便をかけられるなどの個人の尊厳に対する侮辱、屈辱、大音量の音楽や雑音の使用、水、食事、睡眠、トイレの剝奪、宗教(礼拝)を行う権利の否定、強固にロックされた手錠の長時間の使用による摩擦や傷害」などが含まれています。殴打には、金属棒や銃、長靴のかかと、鈍器での、頭部、肩、腎臓、首、背中、脚への外傷が含まれ、肋骨骨折、肩の脱臼、後遺症が残るケースもあった、とのこと。

こうしたパレスチナ人への拷問や虐待に対する内外の政権批判を「反ユダヤ主義だ」と言いふらし、ホロコーストの恐怖を煽り立てて国民を洗脳しているのがイスラエル政府の実情です。ラビがパレスチナ人皆殺しを生徒に教える社会を育てているのです。「戦争は平和」、まさにジョージ・オーウェル「1984年」の世界を超えています。

ただいまリハビリ中



明治大学とイスラエル工科大学の協定破棄を求めた立て看。明大工学部生田校舎

明大土曜会で

4月の明大土曜会にメイと一緒に参加しました。メイが初めて日本に帰国した2001年、大学時代の旧友たちがメイを支え、日本語学校を紹介し公判に通うメイにずっと寄り添ってくれました。メイも土曜会で発言し、アラブ料理を振る舞い、日本に慣れるのに随分助けられたそうです。私の旧友の営む「祭」で行われる土曜会にメイも久しぶりに参加し、店主やみんなと挨拶し若者たちと話し込み、楽しそうでした。店には40人ほどが集まり、みんなで熱く語り合いました。

土屋源太郎さんがまず、砂川事件裁判国家賠償請求訴訟への協力のお礼と今後の方針について語りました。土屋さんは、「国家賠償請求訴訟は、1月15日に東京地裁で判決があり、請求が棄却された。要点は、砂川事件の当時の最高裁判決前に、最高裁長官と駐日米大使が会ったことを判決文で認めた点です。しかし、その理由として、『会ったけれど、すでに最高裁長官は裁判の基本方針を決めてい

た。その上で駐日大使と会ったので、裁判に影響を及ぼしたとは言えない」という判決」と報告。

土屋さんは「ひどい論理だよ。こんな馬鹿な話はない」と言い、「控訴したが、1回目の陳述が終わった段階で結審になる可能性がある。7月に予定されているので、多くの方が傍聴に来ていただきたい。『伊達判決を生かす会』が今年で15周年になる、7月13日に成城大学で記念集会をやります。是非参加を」と述べました。

次に3月の沖縄での抗議行動参加の報告です。毎月第1土曜日に開催されるキャンパスシユワプ前のオール沖縄会議主催の約1000人の県民大行動に参加したことなど、今沖縄が置かれている状況を身体で感じた報告が語られました。そして「6月16日に沖縄の県議会議員選挙があります。県議会の構成は与野党が伯仲して、玉城与党が1議席多いだけです。もし与野党が逆転すると、玉城さんの県政運営も厳しくなるということで、今沖縄では県議選に向けて全力をあげています。本土でも何らかの応援をする必要が

あると思います。」沖縄に関しては若人も補足説明し、「沖縄の基地問題にヤマトの学生がどう取り組んでいくのか。もちろん現地に行くのも大切だけれども、沖縄に基地を作るのを決めているのは東京とワシントンの人間だから、東京で行動するのもそうだし、仲間で学習会などを地道に積み重ねていかなければいけないということを実感した」「集会が終わった後も学習会など、これからも取り組んでいこうと思った」など多くの意見が出されました。

「立て看同好会」という団体の発言も魅力的です。大学に『立て看』の文化を復興することを通じて、学内での表現の自由や言論の自由を取り戻そうという活動をしている団体です。「新人生に向けて、キャンパスの正門前で、新人生歓迎の立て看板と、イスラエルによるパレスチナ人の虐殺に抗議する立て看を設置しました。会員も徐々に増えてきています」と述べ、大学側への立て看と掲示板に関する要望書を大学側に提出しましたが、張り紙に関しては「検討する」ということで、

一つ成果が出たことが嬉しい一方、立て看板については「認められない」という回答だったようです。また、「明治大学はイスラエル工科大学と協定関係にあり、これに対しても立て看同好会は抗議をしています。入学式で、『明治大学はイスラエル工科大学と手を切れ』というプラカードを掲げて入学式に参加する新入生がいます。非常に心強いです。応援してください」と。また『立て看は文化』だという発想はすくおもしろいし、あれは本当に文化だと思う、と半世紀前の若者世代は大賛成です。『立て看運動』は大学同士でつながって、いろいろな支援

したり、相互に支え合っているようです。「東大駒場は米国の大学のようにならね」とサイド抗議パレスチナ連帯のテント村も立て看もあつて嬉しい」と友人も話していました。

また、「このたび全国学生行動連絡会を結成しました。略すと全学連なので間に『行動』を入れました。全国のノンセクトの運動が各地、各大学にありその運動を相互につなげて一緒に頑張っていこうという組織、連絡会を作りました。各地の大学が入っています」と〈全国学生運動連絡会結成宣言〉が配布され、みんなで熱い拍手を送りました。

それから、パレスチナ問題については私とメイが話しました。私がパレスチナの現状と土地の日の「新宿ラッピングデモ」などを報告し、重版になった『パレスチナ解放闘争史』について話しました。

若者の一人が「私の大学の所属しているゼミで、重信さんの『パレスチナ解放闘争史』の輪読が決まりました」と言っていたのには驚き、嬉しいことでした。

メイのパレスチナ報告

メイは、現地報道でしか知りえない話を幾つも例を挙げて話していました。最後に語っていたのは以下のような点です。

「今、世の中の注目がガザに集中しているが、パレスチナ自治区のヨルダン川西岸地区でも一般の人がイスラエル兵や、違法入植者に殺されたり、攻撃されている。イスラエル兵がジープの中からパレスチナ人を撃つたり殺したりしている。今まではジープから出て撃っていたが、車両の上にロケットのパーツを載せて、ゲームのように車両に乗ったままパレスチナ人を狙って撃つことができるようになった。このパーツは日本の企業から輸入しており、テクノロジーがこのような武器装備品に使われている。また最近、日本の市民たちが伊藤忠とイスラエルの軍需企業エルビット・システムズとの間の協定を止めた点を指摘し、『南アフリカのアパルトヘイトを国際社会が制裁によって追い詰めたように、一番効果があるのはボイコットです。イスラエルの製



土曜会でスピーチする重信メイ

品を、輸出しない、輸入しない、買わない、日本政府もイスラエルのドローンを買わない、日本国民もイスラエル商品を買わない、ポイコットすることが大事です。今、国のレベル、政府のレベルでもできないのだったら、市民のレベルでできることをやるべきだと思います。

このようなことにイギリスやオランダの市民も知恵をつかっています。イギリスでは最近、ジェノサイド『防止策』として輸出停止を求める書簡に600人以上の著名弁護士が署名しました。イギリス政府がイスラエルと関係を持つことはジェノサイドに関わることで、『直ちに停止するべきだ。イギリス政府もジェノサイドの戦争犯罪の裁判に訴えられる!』と訴え、市民が政府を監視していること

ただいまリハビリ中

く、パワーポイントでパレスチナ問題をより理解しやすいようにやってみようと思ひ立ちました。スピーチまで1週間もなかったのですが友人がパワーポイントのやり方を教えてくれたので、まず作成済みのレジュメに沿って1枚1枚スライドを作り直しました。画像をコピーしてスライドに引く張つてくることやスライドに言葉と絵や写真をはめ込むことなど、なかなかうまくいきませんでした。何とか48枚のスライドを作りました。まあ初めてだから恥をかくつもりでやってみよう和前日にやっと仕上げました。海外に出張したメイにできたファイルを送ったところ、「字が多すぎる」とダメ出しが来ました。もう時間がないと思ひつつ時差のあるメイの助言を受けて字を少なくして44枚に仕上げ、メイもデザインを加えて見映えがするように協力してくれました。ちよつと寝不足のまま、ファイルとパソコンをもって会場へ早めに着きました。技術者に接続してもらい、パワーポイントの準備OKです。ガザの現在の実情を語り、歴史的経緯は省略しながら

を示しています。政府は、国民が国家政策に関して無知だとなんでもやりたい放題だけれども、国民、市民の人たちからこのような要求があると、少しづつ変わっていくと思います。市民による追及の成果で、最近オランダ、カナダ、スペイン、ベルギーもイスラエルへの武器輸出を止めたのです。日本でもそうですが、市民が見ている、市民が追及しているというのを政府が知るようになると、変わってくると思うのです。武器だけではなく、イスラエル産の商品やイスラエルを経済的にサポートしている商品、サーピスがチェックできるアプリケーション『No Thanks』があります。バーコードを繋ぎただけでわかるようになっていて、とっても簡単です。イスラエル・ポイコット商品一覧も見られるし、さらに詳しくイスラエルとの関わりが知りたい場合は、商品名をクリックすれば良いだけです。『これはイスラエル商品・イスラエル政府や軍に資金を出しているのだから、買わないようにしよう!』という運動もやっていけるのではないかと思います」と

話しました。短い時間ですが、メイも若者たちと熱心に語り合っていました。

パワーポイントでスピーチしてみました

はじめてパワーポイントを使ってみました。4月下旬の救援連絡センターの定期総会でパレスチナ問題について話して欲しいという要請を受けました。レジュメは作ったのですが、間際になって全国中継します、と言われて慌てました。これまでパレスチナ連帯に対する妨害が色々伝えられており、私への嫌がらせで日常生活を乱されたくないの、できるだけ顔を晒さずにスピーチをするよう心掛けてきました。前にたんぼ舎で話した画像がネットでも見られるのですが、顔を撮らない約束だったので手だけが映っていて何だか怪しげだったと友人の感想を受けたことがあります。去年の総会スピーチで小出裕章さんがパワーポイントを使って反原発の問題を鮮やかに語ったのを見て、素晴らしい、いつかパワーポイントを学習したいと思っていました。それでこの機会になんとか顔ではな

パワーポイントで示し、私自身がパレスチナ解放勢力と共同した時代を若干語り、急ぎ足でパワーポイントを練りながら講演を終えました(このスピーチは<https://youtube.com/watch?v=9GILzBTnOXM>で見られます)。パワーポイントはスピーチを助けてくれて大変優れものだと実感しました。友人たちもこの方が分かりやすいと言ってくれたし、作業や手間がかかりませんが、これからも使いたいと思います。また、4月末には、人民新聞のインタビュとその事前打ち合わせもスムーズで受けました。ちょうどIT化の進んだ2000年からの22年間、そしてコロナ禍の3年間の大半も社会で暮らしてないので落差が大きいのですが、市民社会が日常的に機材として使いこなしているものはどんどん学習して使おうと興味津々です。

ナクバ76年目の5月に

ナクバから76年目の5月です。ジェノサイドの最中の5月です。再びのナクバ……。

5月は毎年、パレスチナ抵抗運動はいつも増して激化し、弾圧もさらに激しくなります。ラファは「地上戦」なら米国は武器供与停止か? レッドラインをまだ超えていないかなどと空論的なことを言っているうちにジェノサイドが極限に進んでいます。もうこれ以上殺させないで! こんな歌が零れました。

「背中 腕 足にも書いてよ僕の名前
ちぎれても母さんと離れないために」
パレスチナの厳しい実情を一人でも多くの人に知ってもらいたい。そしてその同情と共感が、ガザ住民を実験台としたイスラエルのドローンを、落札1円で買う日本政府の軍拡に反対する市民の運動と連動していくことを願っています。

『パレスチナ解放闘争史』をこのジェノサイドの時期に出版できて本当に良かった。出版されて以降、書評を描いてくださる方、出版社の方に学術的な指摘をしてくださる方、感想など深く読んでくださる読者の方もおられてとてもありがたい感謝します。

(ナクバの日に 2024年5月15日)